
アンダーグラウンド

黒雛 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンダーグラウンド

【Nコード】

N8886D

【作者名】

黒雛 桜

【あらすじ】

己の野望を実現すべく、伝説の鉱物を求めて地下空間を目指す少女 龍ヶ崎るち。誰も知らない地下に隠された秘密。一人の少女と二人の少年が地下で遭遇する時……運命が動き出す、廻り出す。それは終焉の幕開け 【ややふざけた展開アリ、主にシリアス、そのうちちよつとのラブ有り。ローファンタジーを目指して執筆中です】次話10月中ごろ更新予定。

銀の猫、金の狼と黒の龍 I

薔薇庭園に隠された秘密を知っている？
知らない、知らない。秘密ってなあに？

誰にも言っちゃダメだよ、世界中に隠してる事なんだから。
言わない、言わない。

あのね、薔薇庭園の真下、深い深い場所には……

＊

新東京都には地下27Mの地下鉄用空間より更に深い、大深度地^{グラウン}
下と呼ばれる未使用の空間が存在する。

しかし、その空間から更に深い場所に、国家の上層部がひた隠す
『秘密』が眠っていた。

「ふふふ、ついに見つけた……！　ここが幻の地下洞窟ね。絶対に
ミスリルを持って帰らなくちゃ！」

地上は麗かな春に彩られているというのに、ここは季節など全く
感じさせない、暗くひんやりとした空気を纏^{まと}っている。

どこから薄く灯りの漏れる地下道。不気味な雰囲気醸し出し
てはいるが、アーチ型に弧を描いた天井と地下道の側面は漆喰で塗
装され、荘厳とも捉えることができるだろう。

そんな場所に一人、大荷物を抱えて歩く少女が。

「これであるちは念願の錬金術師になるのよ！」

真顔で、少し、いやかなり無理のある野望を口にする一風変わった少女。

背負ったリュックからツルハシとスコップが大幅にはみ出し、頭にはライト付ヘルメット。

その下から覗く黒髪のショートカットは、土と埃で艶やかさを失っていた。

もともと白かったはずの制服も薄汚れてくすんでいる。

『るち』と自ら名乗った少女は満面の笑みを湛えて、地下空間の奥深くへ進んで行った。

程なくすると、薄く明かりの灯っていた通路は、いつの間にか闇が支配していた。

陰鬱とした暗がりの中、るちは歩みを止める。
付け加えて言うと、恐怖の為に歩みを止めたわけではない。

「伝説の鉱物はこうゆう場所にこそ相応しいのよッ！　いくよ、ツルハシちゃん！」

自分なりの理論を自信満々に吐露し、鉄の塊であるツルハシに声を掛けると、小柄な少女は勢いよくそれを振り上げた。
ツルハシは空を裂くように、床めがけて襲い掛かる。

その時、金属の打ちつけられる音とは別の響きが、るちの鼓膜を走り抜けたのだ。

パンッ！

重く乾いた炸裂音が地下の空気を僅かに振動させた。

ゴツッ。

直後、るちの振り下ろしたツルハシは床を抉ることなく、地面を叩いたにすぎなかった。

柄から伝わる衝撃が電気のように体中を走り抜ける。

炸裂音が生み出した振動など、比べ物にならない程の衝撃波。

「いつ……ったああっ……！！」

目に涙を溜めてのたうちまわる、哀れな少女。

そんなるちの耳には、暗がりの奥から響く、おぞましい断末魔の叫び声など聞こえていなかった。

幸か不幸か。

その断末魔の声を最後に、地下空間には冷気を漂わせるような静寂が訪れた。

直線に延びるこの空間、奥へ行くほど闇が色濃く現れる。
地下道を壁伝いに見ていくと、細い枝道が幾本も黒い口を開けて
いる。

暗い色が際限なく拡がる地下迷宮、と言つに相応しいだろうか。

瞬刻。

暗闇から、二つの足音が床を小さく叩き、それは徐々に少女へと
近づいて来たのだ。

コツ、コツ、コツ……
ザッ、ザリッ、ザッ……

一つは規則正しく、一つは不規則に。

『何者かが侵入してきた』
そう感じたるちは床に転がるツルハシを掴むと、急いで立ち上
り、目の前に迫る侵入者へ身構えた。

「そこにいるのは誰?! ここはるちが先に見つけた洞窟よ、ミ
スリルは渡さないんだからッ!」

二つの足音がピタリと止まる。

通常、15歳の一般女子高生ならば、恐怖で足が竦^{すく}む場面である
う。
が、るちは鼻息荒く凄む始末。

侵入者の顔を拝むべく、頭に装着してあるヘルメットのライトを、足音の先へ素早く照らした。

るちの目の前にいたのは、

眩しそうに眼を細める学生服を着た金髪の少年と、本来切れ長であ
ろう眼を大きく見開いた、銀髪の少年……

この三人の出会いから、“秘密”の幕が、開けられるのだ……

銀の猫、金の狼と黒の龍 II

国家の犠牲になった2人の子供の秘密を知ってる？
知らない、知らない。秘密ってなあに？

人間の定義を奪われて、「化け物」って呼ばれているの。
なんか、なんか可哀そう。

その2人って言うのはね……

薄い唇から思わず驚きに満ちた声が洩れた。無造作に流した銀髪が、僅^{わず}か揺れる。

「な……なんでここに人間が……！」

ライトのまばゆい光により、その瞳孔は縦長に細まっている。本来切れ長の赤眼は大きく見開かれているが、それ以外の綺麗な面立ちは幾分も変化する様子がなかった。

光を直視している銀髪の少年は逆光であるにもかかわらず、少女の姿がはっきりと見えるようだ。

両手にはなぜか薄手の真つ白な手袋。

白い制服をぴしっと着こなした姿はため息が漏れるほど上品で、かつ凜とした雰囲気を漂わせている。

誰もが見とれるであろうこの少年を、るちは嘗め回すように見つ

め小首を傾げて、「どこかで見た制服ね……？」などと、ブツブツ呟いた。

金髪の少年はようやく眩しさに慣れたようで、細めていた目をゆっくり開く。

今までは分からなかったが、以外に大きな目、整った顔立ちはやや幼さが残るも、金の短髪が見る者に威圧感を植えつける。

銀髪の少年とは対照的に、Yシャツの襟を開けネクタイを緩め、着崩したブレザー。服装はどこにでもいるような少しスレた高校生といった雰囲気この少年。

るちの目に留まったのは、そんな外見ではなかった。

髪の毛と同じ色ではあるが、また違った妖しい光を放つ、二つの眼球。

粘りつくほどじっとり金髪の少年を見つめていると、視線に気付いたのか、少年もるちへと焦点を合わせてきた。

まるで野生の獣と錯覚させる金色の眼が、少女の漆黒に輝く双眸ソウを捕らえる。ぽかんと開いた口からこぼれる言葉は、銀髪の少年と大差なく。

「うつそだろ……どうして一般人がここに……?!」

二人の少年は、焦りに似た表情でこの奇妙な侵入者を凝視したのだ。

るちは訝いぶかしげに彼らを一瞥すると、再びツルハシを構えなおし、

「あなた達こそ。ハッ、さては盗賊の類ですね?!」などと、口走る始末。

この少女、常人には理解しがたい精神構造なのだ。

一気に沈黙が地下の暗がりを支配した。
その沈黙を破る、低く冷やかな声。

「百、^{モモ}取りあえずM Gのコンコースに戻ろう……お前も来い、女」

銀髪の少年が険しい表情で、『百』と呼んだ隣に立つ少年へ一声かけると、眼前の少女には冷たい視線を浴びせた。

「だな。つてわけで、眩しいからそれ没収な」

モモはツルハシを構えるちの手首をいとも簡単に掴み取ると、忌まわしいヘルメットを乱暴に外した。

握られた手を振りほどこうと叫び声をあげつつ必死にもがくも、抵抗虚しく哀れ、るちは暗い通路を引きずられてゆく。

薄暗い通路を足早に進むと、先程とうって変わって乳白色の光が降り注ぐ開けた空間にたどり着いた。

漆喰が塗られた壁には、美しい幾何学模様の彫刻が荘厳に広がる。

フロアの突き当たりに、エレベーターが備え付けられており、本来二人乗るのが限度のその箱へ、るちは無理やり押し込められたの

だ。

「ぐ、ぐるじい……」

「ヒッ！！俺にくっ付くな！」

「いいなあ、アギ。ちょ、場所替わってくんね？」

『MG』を目指して上昇するエレベーター。その中はぎゅぎゅう詰めで、実に息苦しいこと極まりない。

アギと呼ばれた銀髪の少年は、るちに抱き付かれる体勢となつてしまい、拒絶を感じさせる小さな叫び声をあげた。

一方の金髪の少年　百はそんなアギをからかうように、「冗談を言いながら笑みをこぼす。

重装備のるちは圧死寸前であるが。

まもなく、ポーンという機械的な音と共に、体にかかっていた浮遊感が収まる。

エレベーターの重厚な三枚扉が開くと、荒い息を立てながら少女一人が転がり出てきた。

冷たい床に這い蹲^{はくす}るるちが目にしたものは、白で統一された広大な研究施設。

国家最上級機密機関・中間深度地下^{ミドルグロウン}

通称『MG』

銀の猫、金の狼と黒の龍　　ⅠⅠⅠ

地下の更に地下で秘密の実験をしてたって、知ってる？
知らない、知らない。実験ってなあに？

しちやいけないコトをしてたんだって。だから誰にも言っちゃだめだよ？

言わない、言わない。誰にも言わない。

人間がするべきではない、愚かな行為、それは……

白で統一された広大なフロア。

無数のパソコンが、乱雑に並ぶ机の上で働いており、壁には隙間なく本やファイルで埋め尽くされた棚が静かに立っている。

床には蛇のようにうねる、太い束の配線が這っているのだ。

あまりにも無駄と思える広さの研究施設。

規模にそぐわない、たった五名の白衣を纏^{まと}った研究員が忙しそうに動いている。

その中の一人がぴたりと足を止めた。

「お疲れサマ。アギト、百哉^{ももや}」

ナチュラルではないが、流暢な日本語の響きがエレベーターを降りる少年二人に届いた。

忙しい中たった一人、労いの言葉を掛ける心優しい研究員が二人に向けた笑顔は、実に温かく、やわらかい。

色素の薄い金髪は癖っ毛なのか緩くウェーブしており、本来冷たい印象を与えるブルーさえも、彼のやりわりした微笑で180度印象を変える。

二十代後半の気品を感じる顔立ちは、白い肌で更に強調され、優雅と品位を兼ね備えているにもかかわらず、長身が纏う白衣は……やや薄汚れ。

非常にもつたいない。

「ご苦勞様です、ラパンツェ博士」

「うさびょん博士もお疲れ〜！」

銀髪の少年、アギトが眼前に現れた碧眼の青年に会釈し、労いの言葉を被せた。

金髪の少年、百哉は片手を上げ、軽い口調で挨拶を交わす。

ふと、ラパンツェ博士と呼ばれた異国籍の青年は目線を落とし、床にへばり付いている少女に驚いた。

「なっ！　なんでここに……い、一般人が……?!　嚴重警備がされているの二、一体どうゆうコトなんだ……?!」

一気に血の気が失せてゆく博士。

白い肌はもはや死人とも思える血色の悪さに変色している。

当のるちは目をしばたたかせて、大のおとながよろめく様をつぶ

さに見つめていた。

「るちを一般ピーポーと一緒にしないでください。あの程度の警備網、楽勝ですよ？ 伝説の鉱物を隠そうたって無駄です！ なにせ、るちはミスリルハンターですから！！」

言い終えると、むくつと立ち上がりエヘンと言わんばかりに胸を張る少女。

薄汚れた姿のるちではあるが、その黒真珠の双眸そうめいは間違いなく輝いている。

博士は驚嘆に満ちた眼差しを。
アギトは疑念に満ちた眼差しを。
百哉は愉楽に満ちた眼差しを向ける。

（バカな…… MGはまだしも、『UG』には国家上層部の人間さえも侵入を許さないというのに……）
信じられないことだ。楽勝などと言つてのける少女に、常冷静のアギトも額に冷や汗をかかずにはいらなかった。

それほどまでに、侵入者の存在は危惧すべきことなのだ。

子供騙しの戯言に過ぎない、そう思いたくてもあの地下空間にちがいたのは事実。

言葉の見つからないアギトは、所々鈍色にびいろがかった服を纏う目の前に立つ少女を、その剃刀の様な目で凝視した。

「マジかよ?! ここはネズミ一匹だって入れねーんだぜ？ お前ミスリルなんとかじゃなくて、泥棒かなんかになったら？」

百哉は見た目通りの明るい笑い声をあげてるちをからかってみせる。

そんな時、三人が乗ってきた逆サイドに設置されてあるエレベーターが到着音を告げた。

重厚な扉がゆっくりと開き、中からは四、五人の屈強そうな黒服の男たちが降りてくる。

「あつちのエレベーターの方が広いじゃん……」
うらがな
心悲しくぼつりとるちが呟いた。

「ご苦勞様ですラパンツエ博士、その少女の処遇は我々に任せて職務を続行してください。特派員の御二方はご一緒に来ていただけますか？」

黒服の男たちの中でリーダー格と思われる、背の高い男が威厳たつぷりの低い声で言い捨てた。

男の有無を言わせぬ迫力に気圧され、博士は小声で「分かりました」と返し、持ち場に戻っていった。もちろん男の背後に立つ黒服の部下たちが博士へ立ち去るようにプレッシャーをかけていたのだが。

見張られていたのだろうか？

警報機の無いこの施設で侵入者を発見するには早すぎて、余りにもタイミングが良すぎる。

リーダー格の男が部下たちに目配せすると、彼らは素早くうちの両腕を掴みあげる。

「んきやあ！ 何するんですか、変態！ 離してくださいっ訴えますよ？！」

「ここを知られた以上、すんなり帰す訳にはいかないんですよ、お嬢さん」

足をジタバタさせ、悪態をつくるちに男は表情一つ変えず、冷ややかな目で見下ろした。

刹那、アギトと百哉を一瞥する。男が二人の少年に向ける眼差し、それは決して友好的なものではない。

間違いなく、侮蔑^{ぶべつ}の眼差しであつた。

銀の猫、金の狼と黒の龍 I V

この国を動かす人間が集まる国会議事堂の秘密を知ってる？
知らない、知らない。秘密ってなあに？

国の偉くて優秀な人は知ってるけど、そうじゃない人たちは知らない事なの。

じゃあ、知ってる人は少ないんだ。

そう、国がこっそり飼っている恐ろしい生き物がいるんだって、それはね……

るちは抵抗虚しく、再びエレベーターに放り込まれた。

文句をありったけ吐き出しながらも、体にかかる浮遊感が極限気持が悪い。

大きい造りのエレベーターではあるが、男六人と重装備の少女一人が乗り込む箱はやはりぎゅうぎゅう詰め。

到着の機械音が鳴ると同時に、るちは乙女にあるまじき嗚咽を漏らしながら嘔吐した……

「うばええええええ……っつ！」

応接室とも思える几帳面に整った内装の部屋。

今まで一度も見かけなかった窓がこの部屋にはあり、外界から射し込む太陽光が地上に戻ったのだと知らせた。

窓からは黒塗りの高級車が数台停車しているのが覗える。金バツチをつけたスーツ姿の人間が、次々とこの建物に吸い込まれてゆくのだった。

この建物こそ国家のブレイン、国会議事堂

「すつきりしました　　るち、今なら空だって飛べる気がします
！」

上機嫌でこの小綺麗な部屋を歩き回っているるち。

「近寄るな！　ゲロ女」
窓際に背をもたれ、軽蔑の眼差しでるちを見ているのはアギト。

「フツーさ、あの密室で吐くか？　オレ、連れゲロしちゃったじやんか……」
目に涙を溜めながら、ソファーに座りため息を吐く百哉。

黒スーツの男からここで待つよう指示され、るちはこの部屋に閉じ込められたのだ。この場所がどこなのか検討もつかず、暇つぶしに室内を眺め回していた。

すると、前ぶれもなくドアノブが回され、例の男が部下を引き連れて入ってきた。

「さて、お嬢さんに聞きたいことがあります。宜しいですか？」

男はソファーから百戦をどかせると、代わりに自分が座り、るちへ目の前のイスに座るよう促す。

「悪の組織には手を貸しません！ ミスリルを手にするのはるちです！」

「……ん？」

るちの暴走気味の発言に、男は一瞬眉間にシワを寄せ暫し沈黙。

「よく分からないが……どこの諜報機関のスパイか正直に吐いた方が身のためですよ、お嬢さん」

ソファーの前にあるガラスの机に肘をつき、組んだ指を顎の下に置く。

薄い唇が笑みを湛^{たた}えた。が、彼の目に笑みが浮かぶことはない。

「るちはスパイではありません、ミスリルハンターです！ あなたたちこそ何なんですか？！

か弱い女子高生にゲロを吐かせるなんてあるまじき行為です！
国家の陰謀としか思えません。このネタを週刊誌にタレこみますよ？」

マシンガントークで猛然と反論するるち。勝手な妄想を展開させる中、男の顔色が急に変わったのだ。

「こ、国家の陰謀だっつ？！ ……ま、待ちたまえ、何が望みだ？ 金か？ 名誉か？！」

るちの肩をゆすりながら、必死の形相で問いたです。
ガクガク揺れながら、男の態度が面白いくらい変化したことに、るちは何か閃いたのかニンマリと口の端をつり上げた。

「……うちの『望み』……ですか？　そんなの、決まってるじゃないですか」

小悪魔のような笑顔に、遠巻きから眺めていたアギトと百哉に不安が過ぎる。

男は固唾を吞んで『望み』の正体が暴かれるのを待った。

「うちの野望は錬金術師になることです！　あの地下洞窟には間違いない例のブツが隠されてるはず……洞窟は先に発見したるちのものです！！」

得意満面に言い張る、凡人には理解しがたいこの理論。
当然男も返す言葉が見つからず……

「分かった。UG……あの地下洞窟はお前にやれないが、ミスリルとやらは好きに探せ。見つけたら持って帰ればいい」

呆れたようなため息と共に、アギトが口を開いた。

自分の意見が認められたことに、込み上がる嬉しさを隠す事無く、その場で小躍りする少女。

驚いたように男がアギトへ鋭い視線を送るが、隣に立つ百哉の唇は無音で言葉を紡ぐ。

『あわせてくれ』

金の眼が、男へ訴える。

「仕方ありませんね……その代わり、お嬢さんは常にこの二人の特派員と共に行動してもらいます。そして、この地下空間のことは絶対に他言無用……絶対に、です」

男は念を押すように語尾を強め、眉をしかめてるちを凝視する。
「もしも守れなかったときは……」という言葉は喉の奥に留めた。

「はい　あつ、るちの名前は『龍ヶ崎　るち』って言います
！　どぞよろしくお願いします、アギ、モモ！」

軽く会釈しながら、全く空気を読まずに声を弾ませるお気楽な少女。

百哉に小突かれながら談笑するるちを、少し離れた位置でアギトと男が見つめていた。

「『龍ヶ崎るち』……確かに国家を脅かす存在とは思えませんね。
いいでしょう、今は君たちに免じて多めに見ます。しかし下手な真
似をしようとするならば即刻、処分指示を出します。女子供の一人、
問題ありません……常に我々が監視していることをお忘れなく……」

「ああ。分かっている」

アギトは男の冷徹な言葉に、冷やかな返事を一言、返したのだ。

始まりは終わりに向けて秒針を動かす I

聖なる薔薇十字の学園があるの知ってる？
知らない、知らない。どんな学園？

とっても綺麗で薔薇が一年中咲いているところ。
ステキ、素敵。

そこはね、世界の運命を変えてしまった場所なの、それはね……

＊

「ねえねえ、国会議事堂って入ったことある？ 実は秘密基地が地下にあるんだよぉ〜知ってた？」

「なにそれ、あんたテレビの見すぎじゃない？ 国会議事堂……って、あるわけないじゃん。知らないし別に面白くもなんともないんだけど……るちってホントどうでもいい情報ばっか持ってくるよね」

「え〜ッひーどーいー！ なっちゃんに秘密の事教えてあげようと思ったのにい〜」

真っ白な制服を着た女子生徒や男子生徒が、白い教会めいた建物に次々吸い込まれてゆく。

白い建築物、名称は聖^{セント}ローズクロス学園。

財閥や有名企業の子息や令嬢、頭脳明晰な子供ばかりが入学する、一ランクも二ランクも上の高等学校。

広大な敷地を所有し、男女別館の学生寮を少し離れた位置に佇立させ、リッチでゴージャスという表現がよく似合う。

そのゴシック調の美しい学園に、薄汚れた制服の少女が友と肩を並べて入っていった。

「出席番号35番、龍ヶ崎」

「はあい！」

朝の点呼で名前を呼ばれ、元気よく返事をする出席番号35番。

「ね、るち。あんたなんで制服そんなに汚れてんの？！……ちよっとクサイし……」

隣の席からヒソヒソと話しかけるのは、るちと一緒に登校してきた『なっちゃん』。

胸下まである茶髪を豪奢に^{じゅうしゃ}巻き、ぱっちり上がった睫毛をマスカラでさらにボリュームアップ。一年生ではあるが、上級生に負けず劣らず丈の短いスカートが彼女の美脚を強調している。ふわりと歩き出せば、大人の香りが鼻腔をくすぐる。

彼女が愛用する香水、”Lolita Lempicka”の甘く、魅惑的な香りは到底るちに理解できないものだが……

どこからどう見てもギャルのなっちゃん、実は化粧品で名を馳せる有名企業のご令嬢なのだ。

対するちは、まとまりの悪いショートカットの黒髪に、薄汚れた制服……おまけに汗か埃か、思わず顔をしかめたくなる悪臭が放たれているときた。

150cmちよつとしかない身長は、ただでさえ子供っぽい言動のうちに追打ちをかける。

知的に見える顔立ちではあるが、一度口を開けば自らそのイメージを打ち砕く破壊力を持っているのだ。

そんな見た目も性格も対照的ななっちゃんは、るちにとって対等に付き合える数少ない友達。

なっちゃんの間に、たつぷり焦らした後、含み笑いを浮かべて、

「んふふ、ひ・み・つ」

「うわ。その含み笑いヒクよ？　ってか、結局教える気ないんじゃない……」

こんな調子で龍ヶ崎　るちの学園生活の一日が始まるのだ。

朝のHRが終ると女子生徒達は授業が始まる短時間、教室を離れてある場所へ向かう。

るちには興味の無いことだが、なっちゃんに引つ張られ渋々付いていくのがお決まり。

一年生の二人が向かう先は、二年のとあるクラス。

【2・B】

そこにはすでに人垣が出来上がっており、教室の中を見るに至ら

なかった。

「あ〜ん……今日も惨敗だね。チラ見すらできないなんて……」
なっちゃんは一人肩を落として、悔しそうに唇を歪ませ歯噛みした。

「ふうん。『ネコ先輩』と『わんこ先輩』を見れなくても、るちの人生になんら支障はないし別にどうでも……」

人垣から離れた場所で、るちはつまらなそうに頬を膨らませ文句を言いかけた、その時。

咽^{のど}を圧迫する殺人的なチョークスリーパーがかまされたのだ。

「げふうっ！」

蛙が潰れたような奇声を発するるちに、スリーパーをかました張本人のなっちゃんは眉尻を吊り上げ、腕をしっかりとロックする。

「るち、『猫宮センパイ』と『犬飼センパイ』でしょあ？ 次にそんなふざけた事言つと、落としちゃうからね？」

悪魔の微笑みに、るちは激しく頭を上下に振って頷いた。

なっちゃん、恐るべし。

そんな時、残酷にも予鈴が校内に鳴り響く。

2・Bに溢れかえっていた群衆は蜘蛛^{クモ}の子を散らすように各自のクラスへ戻ってゆく。

無論なっちゃんも自分のクラスへ戻るべく階段を上っていた。

生徒達がこの2・Bに群がる理由。

それはほとんどの生徒が名を知っているほど、有名で目立つ二人の男子生徒がいるためだ。

王子的容姿で女子生徒から人気の『猫宮センパイ』と、野生的な魅力で男女共に人気の『犬飼センパイ』を一目見るべく、なっちゃん（るちは強制的）は毎朝2・Bへ通っているのだ。もちろん入学してから激しい競争率に打ち勝てたことは、ない。

「はあ……一瞬でもいいから見たいよね……ねえ、るち」

うしろを歩いているはずのるちから返事が無い。

「……ん?!」

不審に思い、そろりと振り返るなっちゃんの背後には、友の姿など影も形もなかった。

始まりは終わりに向けて秒針を動かす I I

秘密の入り口の鍵って、ナニか知ってる？

知らない、知らない。鍵って力チャリとはめてガチャリと開く、アレじゃないの？

アレじゃないよ。物が鍵とは限らないの。

物じゃない？ 物じゃないなら、一体なあに？

それはね、絶対無くしてはいけない、失ってはいけない大切な……

予鈴の余韻が校内に残る中。

今まで騒がしかった廊下が嘘のように静まり返り、生徒の影さえも見当たらなくなっていた。学園の『至誠努力、深慮勤勉』から成る生真面目な本質が、生徒へ忠実に反映されているのだろう。

一方、人垣のなくなった2・Bへ、ひよろつと頼りない中年男の英語教師が教科書片手にドアを開け入ってゆく。

直後、入れ替わりのように二人の男子生徒が退室してきた。

（キターーーーー！）

その様子をドアの横でへばりついて凝視していたのは、るち。鼻息荒く、心の中で大絶叫。

自分の教室へ戻らず、なっちゃんの代わりに人気の先輩をこっそり拝もうという作戦である。

「こ、こらっ！ 待ちなさい猫宮、犬飼！ 授業が始まるんだぞ！」

教師のまっつたく威厳無い静止を無視して、教室を後にする男子生徒。

件の先輩二人である。

「急用ができたので帰らせてもらいます」
「オレ、腹イタインで早退しまーす」

「あつ、こら、猫宮！ 犬か」
英語教師の言葉は続かず。

当の本人達はめちやくちゃの言い分を言うだけ言って、ピシャリとドアを閉めてしまった。

ふと、視界の下部に人の気配が感じられ、二人の男子生徒は足元に視線を向けた。

「「あ……」」

るちもまた、恐る恐る上目遣いで人物を確認する。

「あう……」

おそろしく長く感じられる数秒間の沈黙が、三人だけに訪れる。

「あ、あーっ！ アギモモだあつ。もしかして『ネコ先輩』と『わんこ先輩』って二人のことだったんですね？ あの時どおり

で見たことある制服だと思いましたあゝ」

「げっ！ ゲロ女！ なんて二年こひなごころの校舎にいるんだ？！」

二人の男子生徒のうち、あからさまに不機嫌な顔をするのは、あの地下洞窟で出会った銀髪の少年 アギト。

「わおラッキー この学園広いからこんなに早く会えると思っ
てなかったぜ。実はさ、お前のこと探してたんだぜ？ あの後す
ぐにいなくなっちまって焦ってたんだよ。だけど、同じ制服着てた
からこの学園の生徒だろうとふんでたんだ オレの本名『犬飼
百哉』ってゆうんだ、よろしくな、るち！」

白い歯を覗かせ、無邪気な笑顔で挨拶をする金髪の男子生徒、百
哉。

アギトは憂鬱うつふさげに溜息を漏らし軽く舌打ちをすると、薄い手袋が
はめられた手を腰に当てながら、棘のある口調で言い放つ。

「お前も来い、ゲロ女。これから仕事なんだ」
「うへ？ な、何のことですか？」

三人が校舎を足早に出ると、裏手にひっそりと広がる薔薇庭園の
入り口で立ち止まる。

鼻腔を擽くすくるかぐわしい薔薇の香り。

一体誰が管理しているのだろうか？

手入れの行き届いたアーチを描く薔薇のトンネル。

辺り一面に咲き誇るアンティークタッチローズ、オールドローズ、

ランドスケープローズ……

るちは足を止めて薔薇を眺め、本人さえ気付かぬ自然とこぼれる笑み。

女の子らしい微笑に、アギトと百哉が一瞬だけ目を奪われた。

しかし、のんびり薔薇を……それを見つめる少女を観賞している暇はないのだ。

「るち！ こっちだ、急げっ！」

我に返った百哉はるちの手を引き、庭園の中央に設置されてある温室へ向かった。

全面ガラス張りの円形大温室、天井は浅めの曲面、そこからは穏やかな午前の光が温室内の薔薇たちへ活力を与えていた。

中へ入ると中心へ向かって、薔薇に囲まれた石タイルの通路が迷路のように延びている。

温室の中央にはガゼボ　西洋風あずまや　と呼ばれる六角形型の庭園オーナメントがあり、真紅のつる薔薇が美しい花卉をひろげている。

アギトはガゼボに佇立^{ちよりつ}すると、低く静かに、しかし明確なまでに力強い言霊を紡ぐ。

「LCA、LCD、作戦行動を開始する」

るちは何事かと首をかしげてその光景を見つめ、その隣で百哉は眉を顰^{ひそ}め、きつく唇を結んでいた。

瞬間、アギトの声に呼応するように、地下へつながる隠し階段が、

ガゼボの床に音も無く大きな口を開ける。
微かな振動のみが靴の裏に感じられた。

「行くぞ、百！」

そう促すと、アギトは躊躇^{ちゅうちう}することなく、軽やかに入り口へ飛び込む。

暗い穴がぼつかり開いた床。そこに伸びる階段を迅疾^{じんしつ}の速度で駆け降りた。

百哉はきつく結んでいた唇をほどき、不穏な感情をかき消す笑顔で、再びるちの手首を握る。

「おし、行きますか！」

「へ……るちもですかッ？」

授業が始まり気だるくなる時刻、薔薇庭園へ足を踏み入れたはずの三人は、影も形もなくなっていた……

戦いはひとつの真実を暴く I

薔薇庭園

真紅と純白の美しき調和。

そこに隠されているものは、秘密の“扉”^{ドアクラ}

“扉”を開けるものは異端なる……いや、異質なる二者の若人。

それは麗質なる山猫と勇猛たる狼

今日も山猫と狼は戦うの？ 戦うことが、獣の運命？

*

「わあ、なんですかここ?!」

るちの歓声にも似た声は、広い地下通路の奥深くへ、ずっと消えいった。

高い曲面天井から降り注ぐ仄かな光がなければ、まるで暗黒の世界に等しいだろう。

終わりの見えない長い長いトンネルの中、そんな錯覚を覚えさせる通路をアギト、百哉が足早に進み、その後をるちがのんびりと歩く。

薔薇庭園の温室に出現した螺旋状の階段を降ると、終点に備えられた、薔薇の彫刻を幻想的に刻む美麗な昇降機エレベーターに乗り換え、この最下層まで降下してきた聖ローズクロス学園生徒の三人。

「ここはアンダーグラウンドってんだ。オレらは『UG』って略してるけど。」

国で一番深い場所 最大深度地下が正しい名称らしいぜ」
「ふうん、モモは物知りですね」

百哉の説明虚しく、返って来たのは気のない返事。

この不遜な態度に怒りのオーラを放つ百哉であったが、当のるちは不穏な雰囲気を全くもって読み取れていない。

凡人の精神構造域を遥かに凌駕りようがしているのだろう。

……いや、ただ単に空気を読めないのかもしれないが。

「この地下は学園の薔薇庭園と繋がってる。一般人には絶対口外されない…… 国家の重要機密だからな。ま、お前は例外中の例外だが」

「へえ」薔薇庭園の温室に秘密の入り口があったんですね、るちこの洞窟まで一生懸命穴を掘って来たのに…… 簡単に来れると分かっってしまうと、むっさ気分悪いです」

アギトの言葉にるちは思い切り苦虫を噛み砕いた顔で、不機嫌そうに声のトーンを落とした。

自身の努力を嘲笑う庭園と地下を結ぶ直通入り口。

一本の高速稼働エレベーターが薔薇庭園に隠されていたのだ。

るちは以前通った通路と酷似しているが、全く違うこの仄暗い通路を、好奇の目を泳がせながら歩いている。

その光景は都会にやって来た田舎者さながら。

先を行く二人は慣れた足取りで、後ろの少女を気にしつつ、不気味に^{よど}澱んだ空気が漂う通路を突き進む。

るちは暗がりでもハッキリ分かる綺麗な銀髪が規則正しく揺れる様をぼんやり見つめた。

もう一方の金の短髪は不規則によたよた揺れている。だらしなく大股で歩む様は不良のそれだ。そんな時、くるりと後へ首を回す不良　もとい、百哉。

「ここは迷路みてーに枝分かれしてるから、あんま勝手に動くと迷子になってくたばっちまうぜ！　ぷっ、るちならありえそうじゃね？　な、アギ」

ケラケラ笑う百哉に、面白くないるちは「ふんがっ」と、豚に似た鼻音を鳴らして、急に立ち止まったのだ。

「バツ、バカにしないで下さいッ！」

「あ？」

「15歳の乙女に向かって迷子だなんて失礼なッ……もういいです！　るちはここで一人ミスリルを探しますからアギとモモはどこかに行つて下さい！　どこへ行くのか知りませんが、るち一緒に行きませんからーッ！」

短気なのかどこかズレているのか皆目見当は付かないが、どうやら^ら機嫌斜めのるち。

二人の返答を待たずに、左手に分かれる整備されていない真っ暗

な通路を、たった一人で走って行ってしまった。

「モモのバカチンー！」

バカチンー、バカチンー、カチンー、チンー、チンー……

静寂の地下に大音声が虚しくこだまする。

ひるがえ 翻った白いスカートが闇に飲み込まれるのは、あっという間。

「……え、オレのせい？」

少し困ったように百哉は相棒に視線を向けるも、返って来たのはじと目のイタイ視線。

二人は改めて顔を見合わせ、溜息をついた。

自分たちの秘密を全て知られるわけにはいかない二人にとって、
るちの逃亡は好都合ではあるが、勝手に動かれては実に迷惑極まり
ない。

「チツ。取りあえず仕事が先決だ……あのゲロ女は後で捜そう」

「だな。じゃあさっさと指定ポイントに向かって片付けちゃおー
ぜ」

百哉はスニーカーのつま先で軽く床を蹴ると、姿勢を低く、獲物
を追う獣のように暗い地下を疾走した。

瞬く間に加速してゆく。

一瞬で視界から消えてゆく百哉。アギトは左の横道を一瞥し、再
び溜息をつきながら軽く床を踏んだ。

突風の如く、刹那というに相応しく。

それはまさに人間離れたというに相応しい。

そこにいたはずのアギトは、たったの一步ではるか遠くの場所に移動していたのだ。

一步床を踏む度、残像すら見えぬ^{はや}迅さで奥へ進んで行く。

魔法だろうか、手品だろうか？

または……恐るべき魔性の力が

戦いはひとつの真実を暴く II

『バグ』って存在知ってる？

知らない、知らない。それってなあに？

大勢の人間が知らない存在で、知られてはいけない存在。
ひみつ、ヒミツの『バグ』ちゃん。

だからそのために戦う人間が必要なの、本人が望まなくてもね……

銀髪の少年・アギト、金髪の少年・百哉がたどり着いた場所は、
明かりのほとんど無い地下空間。

「オレ、イッチ番乗り〜！ アギびりっけっ〜」

「……ビリ、つつーか……俺と百の二人^{モモ}しかないだろ」

行き止まりのそこは、通路ではなく講堂に似た一室。

申し訳程度の小さな小さな照明がひとつ、扉の無いアーチ型の入り口をぼんやり飾っている。

あまり広くないが高さを感じさせ、歳月を経た礼拝堂ともいうべき内装。

今まで通ってきた通路には無い、不気味な空気が漂うこの空間に、
どこからともなく隙間風が吹きすさむような、僅かな音^{わず}。

二人は研ぎ澄まされた神経を集中させ、音の出所に目を向けた。

ズズッ

暗闇にぞろりと鈍く動く、影。

一つ、二つ、三つ……と、黒い世界に次々生まれる血の色の光。真つ赤な双眸そうぼうは醜悪な光を帯びて、ギョロギョロ左右に動く。高い、高い位置から漏もれる気味の悪い吐息。

「バグが」

アギトは嫌悪と殺気の混じった真紅の瞳で、その異形が存在『バグ』を見やった。

「うへえ〜。今日はいつぱい来てんじゃん、アギトオレ1ね」

百哉が苦笑し肩をすくめて言ったとおり、闇に蠢うごめくそれは一つではないのだ。

「……なんだその偏った計算は。四体づつ片付けるぞ」

百哉の冗談をするりと交わすと背中左手を回し、腰に装備されていたバックサイドホルスターから、素早く銀色の装飾銃を抜き取るアギト。

通常の銃よりもはるかに大きく扱い難い銃を、手袋をはめた左手がいとも簡単に操る。

45口径　グリズリー・ウィンマグ・カスタム

この国の16歳の少年が持つにはあまりにも禍々しい凶器……

三日月形に裂ける化け物の口から次々と咆哮があがる。

聞くものを震え上がらせる異形の絶叫。

しかし、それらの眼前に整然と立つ銀髪の少年は、

「生まれてきたことを恨め、俺が永久とこしえの眠りを与えてやる」

呪詞のまじまじにも取れる、凍てつくほど低い音を放つ。

斜め上に掲げられたオートマグナムのトリガーは微塵の迷いもなく、しなやかな指によって引かれた。

瞬間。

重く、重く乾いた炸裂音が高い天井に反響し、常人ならば鼓膜を病むであろう。

刹那。

耳を劈くおぞましい叫び声が湧き上がった。

その絶叫はさらに鼓膜をいたぶる。

どちゃり、と暗闇に生まれる不快音。

肉を抉り、骨さえ粉碎する銀の獣マグナムは熱気を帯びた硝煙を吐き出している。

アギトは息もつかぬうちに目線と銃口だけを動かし、標的へ容赦なく引き金を絞った。

「じゃあオレもちゃっちゃんと片付けますか」

うんと背伸びをすると、百哉の体に異変が起こる。

バキバキと音をたてて肉体が変質していくのだ。

程よい筋肉で均衡のとれた16歳の体はいびつに波打つ。全身から放たれるものは殺気だろうか？

四肢からは暗色の体毛が伸び、爪は鋭く尖り、口から妖しく光の
毀れる牙。^{こほ}

百哉の制服を吸収して、肢体に荒々しい被毛が全体を覆った。

それは人間の姿に非ず。

少年の幼顔は消え失せ、代わりに牙を剥き出し、金の目をギラつかせる獰猛なる獣がいる。

百哉は見るも禍々しい野獣へ変貌を遂げ……

「さあ、どいつから逝きたい？」

まるで人語を操る悪魔の響き。

その低い唸り声は、地下の空気を振動させた。

地面に着いた四つの脚がゆっくりと歩き出し、すぐにピタリと歩みを止めると、重心を低く落とす。

その金色の双眸が睨めつけるは、獲物のみ。

バネのように身を縮め 一気に開放。

驚くことにそのまま室内の壁を垂直に駆け上がったのだ。

梁^{はり}に身を潜める標的めがけて、狩人の爪牙が襲いかかる。

ギヤガアアアアアア……

仄暗い通路にまで届く断末魔の慟哭^{もつこく}。

「うげ、オレの手、バグの血がべっとり付いてる……なんか拭くもんじゃないかなあ……あ。アギ、その手袋貸してくんね？」

「却下」

真っ黒な血が手の甲にこびり付き、気分悪そうにプラプラと手を振る百哉。金髪が目立つ、いつもの百哉に戻っていた。

アギトは気だるい声で返事を返すと、自分は取り出したハンカチで銃を丁寧に磨きだす。

「あっ一人だけずるっ……！ オレにそのハンカチを笑顔で渡すのが友情ってもんぢやねーの？」

「……」

隣で子供のように口を尖らせ駄々をこねる相棒を黙殺。

アギトは僅かな光に反射する銀色の狂気を黙々と拭いていた。

真っ暗な室内には先の喧騒が嘘のように静まり返っている。無論、その理由は言わずとも、八つ裂きあるいは肢体を抉られた

異形の骸、またはマグナムの威力で穿たれ粉碎された、物言わぬ化け物を見れば明らかだ。

鼻が曲がるほどの異臭は、生臭いような、腐敗臭のような――

そんな時、暗闇を照らす人工の光と共に、静寂を破る声が響いたのだ。

「……なっ。何なんですか……この気持ち悪い怪物の死体……？
モモの手、血が付いてます。アギ、そのごっつい銃みたいなの……
…本物、ですか？」

自分達の『仕事』が片付き、気が緩んでいたのだろうか？
気配に全く気付かず、背後から聞こえる声ではじめて振り返るアギトと百哉。

入り口にはその凄惨な光景を訝しげに見つめるちが、呆然と立ちすくんでいた。

戦いはひとつの真実を暴く I I I

誰かを殺したいと思つた事、ある？

分らない、解らない。だってそんな感情ないもの。

そう、それは人にしかない感情、それは殺意。

恐い、怖い。人間ってこわーい。

そう、だから人には理性が備わっているの。それを捨ててしまったときは……

体中の血が逆流するようで気分は良くない。

それは殺人衝動などの類ではなく、純粹なる防衛本能と言つべきだろう。

今すぐ殺すべきだと、脳内に響く何者かの声。

それは己の内に秘める悪魔の声だろうか？

否……正常なる精神を欠いてしまった哀れな己の声だろう。

小さな小さなライトの光が、暗闇を僅かに照らす。

胸が悪くなるような汚臭、むせ返るような悪臭。

それは入り口一つしかない空間に、嫌というほど充満している。

死骸が散らばる室内に屹立する二人の少年を、るちはその大きな目で、瞬きもせずに見つめていた。

「騒がれる前に、殺す」

唸り声かと錯覚を起こすほどの低い声で、百哉はぼそりと呟いた。殺気を帯びた黄金色の眼は、目の前の華奢な首だけを捉えている。

見られてはならぬものを、見られてしまった。知られてしまった。

「迂闊だ……まさかここへ来るとは思っていなかった……」

ぞくりとするほど低い声は、吐き捨てるように、冷たく囁く。

アギトが後ろ手にマグナムのグリップを握りながら、「仕方ない、面倒を起こす前に」と、小声で言い掛けたとき。

遮って、るちが言葉を重ねてきたのだ。

それは弾むように、楽しげに。

「いえ、やっぱり言わなくても分かっています！ なにせ相手は伝説の鉱物、ダンジョンに魔物がいてもおかしくありません！ アギが魔物を倒す銃を持っても不思議ではありませんし、モモは何かしらのスキルを獲得しているんですね？！ あ、るち独りぼっちになって寂しくて二人を追いかけてきたわけじゃあ、ありませんよ？ そ、そんなんじゃないですからねッ」

大げさな身振りでうんうん頷く少女。

意気揚々と興奮気味に繰り出される不可解な台詞……るち、お得意のマシンガントークが炸裂する。

アギトと百哉の目が一瞬で点と化したのは言うまでもなく。

「ハ？」

思わず間の抜けた声がアギトの口から漏れ出してしまった。

「えつ。普通この光景見たら引かね？ るち目え見えてる？」

こんな風に、体内で滾^{たぎ}っていた血が一気に冷却されていくのは百哉自身初めてのこと。

呆れたように目の前の妄想力豊かな少女をまじまじ見つめる。

その二人の態度と視線で、馬鹿にされていると悟ったるちは、猛然とまくし立てたのだ。

「なつ、なんですかそのるちをこ馬鹿にした言い草はっ！ るちを一般ピーポー略してパンピーと一緒にしないで下さいっ！ 今はミスリルハンターと銘打っていますがいずれは偉大なる錬金術師に

」

「わーかった、分かったってえ！」

聞くに堪えなくなつた百哉が、宥^{なだ}めるようにるちの目の前に両手をかざし、ストップをかける。

アギトは一つ溜息をついてから、努めて冷静に切り出した。

「この地下……UGも、俺たちが『バグ』と呼んでるこの怪物も、俺たち自身の能力も全て国家機密だ。約束どおり、秘密は守ってもらっぜ」

「なっ！ るちは約束を破るほど落ちぶれちゃありません！ ミスリルを横取りしない限り、約束は守ります！ るちに二言はありません！！」

言い終えると、途端に沈黙が地下の空気に緊張感をもたらした。アギトの真紅の眼と、るちの漆黒の眼が寸分もブレずに向かい合う。

言葉数の少ないアギトが何を考えているかなど、るちには解るはずもない。

意味不明な発言を繰り返すちを、理解しようなどとは思わぬアギト。

意思の疎通は不可能に近い。

二人の視線はじりじりと焼け付くように、ぶつかり合っている。

暫し沈黙が暗闇の不気味さを上回る。

「あッ……くしょーい！！」

掛け声と共にくしゃみの大音声が沈黙を破壊したのだ。声の主は

睨み合いに参加していなかった百哉。

アギトとるちからギロリと睨まれ、申し訳なさそうに肩を竦める金髪の少年のくしゃみは偶然か、故意なのか。

「まーまあ、オレらの仕事も終わったし、るちもこここの存在を納得してくれたみてーだし、早く戻ろうぜ」

百哉の口調は緊張感の欠片もないほど軽薄なものだが、正論には違いない。

アギトの背中をバンバン叩き、るちのショートカットをくしゃくしゃに撫でる。

硬くなっていた二人の表情が一気に崩れ、アギトはいつもの冷静さを取り戻し、るちはやっと屈託のない笑顔に戻ったのだ。

百哉はさながら二人の潤滑油といったところか。

三人は肩を並べて暗い講堂に散らばる凄惨な現場を後にした。目指すは、地上にある日常の世界

地上のネコ

他人の心を知ることはできない。

どうして、どうして？ 知りたいのに。

相手に心を許さない限り、永遠に知ることはできないの。
だから、だからあなたは冷たいの？

そう、ホントの自分を隠すため。だから……

*

地下で起こる血生臭い惨状とは無縁の地上。
穏やかでゆつたりとした時間がこの世界には流れている。

柑橘系の爽やかな香りが漂う、清潔で落ち着いた雰囲気個室に、
不快極まりない音声が遠慮なく響いた。

「うばえええええつ、おえつ」

別の個室に入っていた女子生徒は、思わずびくりと肩を震わせて
しまった。

筒抜けの声に、その場にいた複数の生徒が眉をひそめる。

聖ローズクロス学園 2階 1学年専用女子トイレ

女子にあるまじき嗚咽を漏らしながら、便器に顔を向けて苦しみを吐き出す乙女がいた。

龍ヶ崎 るちである。

しばらくすると、胃から絞り出されたような声は治まり、本来の静けさを取り戻した女子トイレ。

しかし、反応の無くなった個室をギャル風の女子生徒が不安げに見つめる。

「るちいゝ死んだ?!」

問いかけにもトイレの主は無反応なため、ドアを叩こうと手をかざしたその時。

突然個室のドアが開き、思わず女子生徒は2、3歩後ずさりした。

「キャハー るち、ふつかあーっ！ お待たせゝなっちゃん」

額にピースサインを掲げ、目から涙、鼻から鼻汁、口からは朝に食べた食材が細かくなって唾液と共にあごを装飾していた。

なんとイタイ子なんだろう、と哀れみの眼差しを向けるなっちゃん。

どうやら、あの地下空間から地上に出るまでの上りエレベーターはるちにとって、相当キツイようだ。

やっと地上の薔薇庭園に戻ってきた時はすでに3時限目の授業が終っていた。

アギト、百哉と別れてるちはこみ上げる吐き気に、慌ててトイレを目指した。

授業が終わり、メイクを直そうと、たまたまお手洗いに向かっていたなっちゃん。

彼女と遭遇したるちは、ろくに会話もせず勢いよく一番奥の個室に駆け込み、苦しみから解き放たれたわけだ。

教室へ戻ると、すかさずなっちゃんからの質問攻めが始まる。

四時限目の授業が始まる数分間、るちにとってはさぞ長く感じることだろう。

「るち、あんた3時間もどこほつつき歩いてたのよ?!」

「えと……」

「まさか興味無いとか言いながら、猫宮先輩と犬飼先輩をこっそり付けまわしてたんじゃないでしょうね?」

「あう……」

「今日の数学当てられるから答え教えてくれるって約束してたのに!」

「それ約束してな……」

「うるさいうるさい!!」

なんと理不尽な会話か。

分が悪いるちは反論できずに叱られた仔犬のように身を縮めていた。

その時、教室のドアを勢いよく開けるものがいた。

もちろん予鈴はまだ鳴っていないので、教師ではない。

音の先へ視線を向けた生徒達から俄かに驚き混じりの歓声があがった。

黄色い声が徐々に音量を上げていく。

るちとなっちゃんも騒がしくなる教室内を不審に思い、ドアへと目を向けた。

途端に石のように固まるなっちゃん。

るちはドアの前に立つ人物を目を丸くして見つめた。

「あ”っ……なんでるちの教室にアギがっ……」

問題の人物を凝視するうち、苦虫を踏み潰した表情に変わっていくるち。

その人物とは美しい銀髪をなびかせる、聖クロスローズ学園2年の、猫宮アギト。

「龍ヶ崎！ このクラスにいるのは割れてるんだ、速やかに起立しろ」

ひとクラス36人のため、目的の人物を探し出すのは骨が折れる。苛立たしげに教室内に視線を走らせるも、すぐに見つかるはずもなく。

「早くしろ！ ……ゲロ女！！」

止めの一撃を吐くアギト。

もちろんこの屈辱的な暴言を受け止められるほどるちは寛容ではない。

「ゲロのどこが悪いんですかぁー！ッ！」

机を叩きながら立ち上がる怒れる乙女、龍ヶ崎　るち。
否定しないんだ、と一部始終を聞いていたクラスメイトたちが心
の中で呟いた。

るちが立ち上がったその時、額にゴツンと物の当たる衝撃が走る。
目頭に涙を溜めながら額を押さえ、落下した物を拾い上げると、
それはるちの小型ライトだった。

どこで落としたのだろう？　考えられるのはあの地下洞窟を去っ
て学園に戻る間だろう。

「落し物」

素っ気無く一言告げると、アギトは踵を返して教室を後にした。
るちがネコ先輩の姿を見たのはほんの一瞬にすぎなかった。

その間も黄色い声は、彼の姿が3階の階段を上りきって見えなく
なるまでずっと、キンキン響いていたのだ。

手の中に納まったライトを見つめ、「まったくもう。あんなヒョ
ロくて見た目運動できなさそうなのに……コントロール抜群だなん
て、反則ですっ。ホントは優しいくせに、素直じゃないですねぇア
ギは」言って、温もりの残るライトをぎゅっと握り締める。

言葉とは裏腹に、るちの大きな目は嬉しそうに細められていた

その後予鈴が鳴るまで、学園アイドルを生で見る事ができた、
女子生徒たちの興奮は収まらず。

興奮の絶頂に達したなっちゃんは、頬を真っ赤に染め、硬直したま
まフリーズしている。

質問攻めを怖れていたるちは、憧れの先輩を前にしてとろけてしまった親友を見つめ、しめしめ、と心の中でほくそ笑んだ。

秘密は、未だるちの胸の中に

地上のオオカミ

幼い頃愛情を注がれなかったら、愛を知らずに育つのかしら。知らない、知らない。だってずっとふたりきりだもの。

他人の愛を求めず、歪んだ愛を与えるのかしら。知らない、知らない。だって愛は必要ないから。

捻じ曲げられた感情はいつかもとに、戻るかしら。

*

学園の寮に寄宿する生徒が大半を占める中、るちは一人家路にいた。

いつも学園の校門から一緒に登校するなっちゃん。

下校でも校門までは一緒に帰り、敷地外から別々に帰宅する。

有名化粧品会社のご令嬢は送迎車が出迎え、一般庶民のるちは一人徒歩で家路につくわけだ。

「むふっ、やっぱりあの地下洞窟には伝説の鉱物・ミスリルが眠っているに違いないわ……これるちは錬金術師へ一步近づいたのね！」

ニヤニヤ薄ら笑いを浮かべて歩道を歩くるち。

通行人が避けて通っているなど本人は気付くよしもない。

学園から家までの1時間の距離を、バスも使わず、妄想の世界に
浸りながら歩くのだ。

徒歩の理由は彼女の私生活を知る者ならば納得できる。
知る者がいれば……の話だが。

学園線のバス通り。

ふと、反対車線のバス停に顔を向けたるちは、見覚えのある金髪
男子学生の後姿が目に見え込んできた。

聖ローズクロス学園の白い学生服を着ている。

間違いない、学園で人気を博する『わんこ先輩』こと、犬飼百哉
である。

そして秘密を共有する人物……

寮生の百哉がなぜこんなところにいるのだろっ、と疑問に思いな
がらるちは声を掛けるべく腹に力を込めた。

「モ」

モモ。と叫ぶつもりだったるちは慌てて続く言葉を飲み込み、側
のゴミステーションの陰に急いで隠れる。

ゴミステーションからそろりと顔を出し、再び百哉を確認。

初めは後姿で何をしているか分からなかったが、途中で気付くと
心臓が口から飛び出んばかりに騒ぎ出した。頭へ一気に血が上り、
めまいで一瞬視界が揺れた。

「モモ……知らない学校の女の子と……チューしてるっ……！」

るちからはやや死角になっていて見えにくいが、百哉の目の前には他校の女子生徒が立っており、歩道の真ん中で唇を重ねあっているではないか。

恋愛経験ゼロ、少女漫画は刺激が強すぎて直視できない。

キスシーンなどもっての他という、今どき珍しい女子高生のるち。

「モモがチューしてる……モモがチュー……モモチュー」

頭から足先まで火照り、顔面は火を噴いているように熱い。動悸が治まる気配はない。

今見た衝撃の光景を、呪われたように何度も言葉にする。

「モモチュー、モチュー、モチユウ、もちゅ……」

「ああ？ 何だよ、『もちゅう』って？」

しゃがみ込んでいたるちの頭上に問題の人物の声が響いた。俯いていた顔を反射的に上げると、先ほどまで十数メートル離れた場所にいた例の人物が。

「はひゃん！ モっ、モモ……！」

驚いて裏返ってしまった声と、耳まで真っ赤になったるちを見て、百哉は全てを察したのかケラケラと明るく笑ってみせた。

「はい、るち」

手渡された缶ジュースが火照った手を少しでも冷ましてくれた。
近くの自販機で奢ってもらった、りんご果汁100%ジュースを
ずずつと飲み込む。

まだ顔が熱い。

あのキスシーンが頭から離れない。

他の会話をしようにも、上手く整理がつかず、違った話題など思
いつかなかった。

そんなわけで脳内に居座っている件を会話にするしかないのだ。
くだり

「……モモの彼女さんですか……？ さっきの……ちゅうしてたヒ
ト……」

「あゝ……もしかして、るちってば妬いてる？」

喉の奥から絞り出した質問に、悪戯っぽく笑って質問を返してく
る百哉。

もちろんそんな会話に免疫のないるちは、額に妙な汗を浮かべ、
ぶんぶん必死にかぶりを振る。

冗談、ごめん！ と黒髪のショートカットをくしゃくしゃ撫でる
百哉に対して、少しだけ落ち着きを取り戻したるち。

「あのコは別にそんなんじゃないよ。向こうがオレのこと『好きだ
って言うからキスしたただけだし』」

「えっ……？」

「オレはあのコに興味なんてさらさらねーけどな」

少女の黒真珠に、屈託のない笑顔が不自然に映る。

（それって好きな人とするんじゃないの？ モモは何とも思っていない人とチューしたってこと？ それは普通のことなの？）

湧き上がる疑問。

平然と、当然のように言っただけの百哉。

恋愛感情については理解しがたい、しかし。

（モモ、愛情はないんですか？）

押し黙って俯くるちを、いつもと違う少しかけ弱りのある金の瞳が見つめていた。

しかし、沈黙は長く続かない。

「なんならちにもチューしたげようか」

弾んだ声がひんやりした空気を一気に拭い去る。

百哉の突然切り出した言葉に、びくりと肩を震わせたるちは慌てて顔を上げた。

再び頬を赤らめた純情少女が、「もうっモモのバカ！ 変態！

エロ！ ハゲ課長！」とあらゆる罵声を健全な男子学生に浴びせ、負け犬のように一目散に走り去っていった。

るちが見えなくなるまでその場に立っていた百哉は、自嘲気味にフツと嗤うと、踵を返して学園の寮へと歩いていった。

「愛情なんて、とっくの昔に捨てたんだよ、オレは……」

誰に言つでもなく、百哉はそつと呟いた

暗澹世界に想う I（前書き）

長いこと停滞してしまい、申し訳ありませんでした。
亀更新の作者に生温かい眼差しをむけてやってくださいますよう。

暗澹世界に想う I

ボンジュール、コマン・サヴァ・

……うい？

イル・フエ・ボウ！

……ぱーどうん？

遠い地からはるばるやってきた兎は、重たい十字架を背負ったの。
なんで、何で？ そんなもの、欲しくなかったのに？

そんなものを背負うと知らなかったの。
十字架はどんどん重くなるのにね。

*

都心から離れた住宅街。

都会めいた建物は少なく、コンビニの代わりに商店がわずかに存在している。が、とつくにシャッターを下ろして店主は眠りについているようだ。

家屋から明かりの消えた町は無数の墓標が建ち並ぶ墓地にさえ思える。

まるで暗黒の王が夜を支配しているかのようで。

誰もが寝静まった深夜、とある民家で睡眠を邪魔する携帯電話の着信音と、バイブレーションが激しく机を叩いた。

寝^{まな}ばけ眼で布団から起き上がり、「一体誰よ」と乱暴にケータイを引っつかむ家主。

「……うちの安眠を邪魔する不届き者は名乗りなさいッ。ばわいによつては　　」

呂^{ろれつ}律こそ回っていないが、眠りを妨げられ確実に不機嫌な、るちと名乗った人物　龍ヶ崎るち。

一呼吸置いて耳に届いた声は、実に明るく明確な響きだった。

『オハヨ、るち　今さあ学園の薔薇庭園にいるわけ。るちもUGまで連れて行っただげようか、ミスリル探すんだろ?』

「……モモ……ですか?」

『そつ!』

一気に脳内が覚醒したるちは、電話の相手、犬飼百哉が電話越しにニヤツと笑ったような気がした。

行ける訳ない、百哉とアギトは学園付属の寮に住んでいるが、自分分は片道1時間半の場所から通っているのだ。

「るちは行けない」そう告げようとした矢先、先手を打ってきたのは百哉の方だった。

『あつ、でも無理かあだつてるちは寮生じゃねーもんな。一緒に行けなくて残念だな。なっアギ!』

わざとらしい口調。

この電話が嫌がらせのために掛けられたと、ようやく気付いたるちは悔しさでわなないていた。

「もういいですッ！！　モモもアギも大ッ嫌いです！　二度と話しかけないで下さい！！」

言い終えると返事を待たずに素早い手つきで電源を切った。

昨日、百哉に携帯の番号を教えたことを後悔し、るちはそば殻枕を手に取り、ムキヤーと雄叫び一つあげて布団へ叩きつけた。

「『秘密』、もう誰かにしゃべったのかな？」

「話してたらとくに始末するよう声が掛かってるさ」

「そーだよな、良かった良かった」

「組織が何もかも見張ってる……俺たちは俺たちの仕事をすればいいだけだ」

地下の薄暗い床を軽く蹴ると、数十メートルを一瞬で移動する二人の少年。

移動しながらの意味深な会話は、銀髪の少年アギトの、少しも感情の乗らない言葉で締められた。

最大深度地下　通称『UG』

ここでこの二人の少年に課せられた「仕事」は非現実で恐るべきものなのだ。

地下通路の行き止まりはあらゆる光を遮断された暗黒世界。

そこに生まれる限られた光、天井付近に次々と点灯される残虐に満ちた六つの赤眼。

歩みを止めた二人。

斜め上に視線を上げると、気味の悪い、赤い光がアギトと百哉を睨んでいるようだ。

自分達を見下ろすそれが何なのか分かっているアギトは、フツと鼻で笑う。

そんなアギトの隣に立つ百哉はポケットに手をつ込んだまま、唇に孤を描いた。

異常な暗闇を何の障害と知らない二人こそ、異常な者としか言いようがない。

「生まれてきたことを恨め、俺が永久とこしえの眠りを与えてやる」

聞くものを凍えさせてしまうような、冷たく低い言霊を紡ぐ少年。しかしその声と反するように、彼の双眸は灼熱紅蓮の炎を宿しているように見える。

バックサイドホルスターから抜かれた銀の装飾銃　グリズリーが瞬時にけたたましい咆哮をあげた。

化け物の絶叫と硝煙が立ち込め、轟音鳴り響く地下空間……『U』。

金の眼が楽しむような笑みを湛え、妖異な輝きを放っていた。

今、『犬飼百哉』という少年の姿はどこにも存在しない。

四本の脚で闇をゆったり進む異形の獣がその少年の代わりに存在しているだけである。

狼よりも鋭利な犬歯を覗かせ、異形の獣は地鳴りのような唸り声をあげる。

金の眼光は、壁面を移動する醜悪なる獲物をしつかり捕らえ、一
気に間合いを詰めると容赦なくその残忍な爪を振り下ろす。

UGに再び静けさが戻るのに、そう時間は掛からないだろう……。

暗澹世界に想う II（前書き）

毎度更新が遅くてすみません><

あたたかいコメントを頂いて、とても嬉しく、気合を入れすぎた結果、今回は文字数が多くなってしまいました。ご了承ください。

暗澹世界に想う II

ココロでは優しさが欲しいと願っているの。
どうして、どうしてそんなものが欲しいの？

ヒトは一人で生きられない、寂しいイキモノだから。
可哀想なイキモノなのね、ニンゲンって。

だけど、あの子には優しさを受け入れられないの。
どうして、どうして？ 優しさが欲しいって願ってるのに？

そう、それはね……

ガラス張りの大温室から見えるのは、白み始めた空に淡く煌めく
星たち。

あんたん 暗澹世界が広がる地下から、地上に広がるはくめい薄明の世界へ。

UGと繋がる階段を上りきった百哉は、眩しそうに目を細めて、
明け方の空を見上げた。百哉に続いて温室のガゼボに戻ってきたア
ギトは、ふと、背後に何者かの気配を感じ、銀髪を一つ振った。
反射的に、左手はホルスターに収まるグリズリーにかけられている。
続けて百哉も気配を感じ取り、慌てて視線をめぐらせたのだ。

その瞬間、

「ひどいです……二人とも」

呪詛のような、重い声調で、ふてくされた様に言い捨てる人物が、アギトと百哉の目線の先にいた。

「るち?!」

「ゲロ女……」

今にも落ちてしまいそうなまぶたを懸命に持ち上げ、ふらつく体をツルハシで支える　上下寝巻きにスニーカーを履いた、どう見ても場違いな人物、自称ミスリルハンター龍ヶ崎るち。

二人の背後に亡霊のように佇立^{ちようりつ}していたのは、彼らと秘密を共有する少女であった。

「せつかく重たいツルハシちゃんまで背負ってきたのにつ!　どうしてるちを置いて洞窟へ行っちゃったんですかあ?!」

今にも泣き出しそうな顔でアギトと百哉を非難するも、その二人の表情は何を言い出す、と言わんばかりに険しかった。

(『もういい』って電話を切ったのはお前だろ……)

渋い顔を浮かべ、心の中で同時にるちへツッコミを入れる。

「分かった分かった、落ち着けて、鼻息がブタみてーだぞ。んじや今度は一緒に行こうな?」

「もちろんですつ。約束破ったら『秘密』をタレこみますからね!」

百哉は子供をあやすようにるちの頭に手を乗せ、諭すように語りかける。

そのお陰か、今まで沈んでいた声色が一気に明るくなり、ようやく笑顔を取り戻したるち。といつても、ニンマリほくそ笑んでいるだけであるが。

この時、るちは自分が彼らの弱みを握っていると、信じて疑わなかった。

るち自身、命を握られているとも知らずに……。

ふと、仏頂面でそつぽを向くアギトに、るちは目を凝らした。いつも完璧な容姿であるはずのアギト。その頬に、ほんのわずかな血痕が付着していると気付いたるちは、それを拭おうと手を伸ばす。

「アギ、ほっぺに血が」

もちろん悪意はなく、ただの善意にすぎなかった。

しかし。

その善意すらも

「ッ！ 俺に触れるなッ！！」

るちが伸ばした右手は勢いよく弾かれ、一体何事かと、黒い宝石のような目をしばたかせる。

怒りを含んだ低い声とは裏腹に、アギトのルビー色の目には怒りとは別の感情が込められていた。

恐怖、畏怖。

そして、

拒絶。

「……ご、ごめんなさい……ただ、アギのほっぺに血が付いてたから、拭こうと思って……」

突然のことに動揺するちは、バツが悪そうに口ごもらせ謝ると、怯えた仔犬のような目で遠慮がちにアギトを見つめた。
俯く少年の顔色はよく見えず。

そんな時、重たくなった空気を引き裂く声があがる。

「あー……、アギはさ、潔癖症なんだ。ちの手を叩いたのはやり過ぎだけど、ちよつとだけ分かってやってくんねーかな？あとで、俺がお仕置しとくからさ」

少し困った表情で、口を挟んできた百哉。彼なりのフォローであった。

ちらりと百哉を見てから、再び恐る恐るアギトへ視線を走らせる。数秒の沈黙を経て、探るように切り出す。

「け、潔癖症……？あ……、だからアギはいつも手袋してるんで

すか？」

「……」

その問に答えはない。

「初めから言ってくればよかったですよ、るち、嫌なことはありませんから。隠し事なんてしないで下さい」

「……」

その約束に返事はない。

「るちとアギとモモは、仲間じゃないですか」

一方的に話かけると少女はやりわり微笑んだ。

朝日が温室のガラスに反射し、るちの笑顔がよけい眩しく思える。

その確信に満ちた言葉に、アギトは頷かない……。

（『仲間』……か。俺とお前はこうも違うのに、本当の俺を知ってもお前は『仲間』と言えるだろうか？）

冬の湖面に似たココロの奥底で、アギトは答えの返って来ない問を投げかけた。

今まで黙って立っていた百哉であるが、重たい空気を振り払うように、俯くアギトの背中を軽く叩く。

加えて、るちに負けず劣らずの笑顔を作って、切り出した。

「よっしゃっ！ アギのビミョーな秘密もバレちゃったし、おまけに朝になっちゃったし、もー帰ろうぜ！」

「え、るちこれから家に帰ると完璧遅刻です……。あつ！でも、パジャマだし、どうしようモモお」

現実問題突きつけられ、ハツと我に返るち。

遅刻か寝巻きかという究極の選択を迫られ、哀れな少女は百哉のブレザーに縋^{すが}つてみた。

「アハハ　パジャマで登校すればあゝ？」

「……自業自得だろ」

さらに、いつもの冷血さを取り戻したアギトからの追い討ちが加わる。

「んなッ！　もういいですッ！　アギモモモ大大大ッ嫌いですー！　絶交ですからー！！」

高々と叫び声をあげながら薔薇庭園を猛然と走り去ってゆくち。

温室に残された二人は小さくなっていく少女の後姿を見つめていた。

金髪の少年は苦笑いを浮かべながら。

銀髪の少年は硬く口を結びながら。

暗澹世界に想う I I I

ヒトは、運命を信じるかしら？

知らない、知らない。ウンメイって、なあに？

すべての事柄は意味を持つてゐる、不思議な力で導かれている、シアワセとフシアワセの廻り合わせ。ヒトはそう言うの。

おもしろーい。でもそれはホントウの意味じゃないね。

そう、それはただの作られた舞台と台本、人形と人形師。

細い糸で踊らされるのは……

「ねえねえ、なっちゃんいい事教えてあげようか」

「別にいい。どうせるちの情報はいくらもないことばつかでしょ」

「あのねえ、ネコ先輩って……うぶぶ、潔癖症なんだよぉ。トイレはどうして　ぶッ！」

「ネ・コ・ミ・ヤ先輩でしょ？　そんな事ファンなら誰でも知ってるわよ。むしろ高潔な感じが、さらに王子オーラを惹き立てるじゃん」

一時限目の生物の授業、実験室ではおしゃべりを楽しみながら、生徒たちが顕微鏡やルーペを使って、葉緑体の観察を行っていた。ちとなっちゃんも例外ではない。

禁句である『ネコ先輩』と口を滑らせてしまい、顔面パンチを食らったるちは椅子から転げ落ちていた。

「それよりも……アンタなんでジャージなわけ？」
「ううっ……それは秘密……痛い」

まさかジャージの下に寝巻きを着ているとは、さすがの親友も気付くまい。

ジャージ姿で登校し、授業もその姿で平然と受けている。どうやらるちに羞恥心というものは存在していないようだっただ。

彼女の親友が半ば呆れたように質問すると、返ってきた答えは『ヒミツ』。

なっちゃんはさして興味がないのか、あっそ、と一言呟くと、顕微鏡そっちのけでケータイを弄りだした。

（よく分かんないけど、これが世に言うツンデレ……？ でも、暴力反対……）

捨てられた雑巾のように、理科実験室の冷たい床へへばり付くるちは、心の中で平和主義を訴えた。

そんな目に見える平穏が流れる中、時を同じくして。

暗い室内にぼんやりと青白い光だけが浮かんでいる。どこかの地下室であろうか。春めいた暖かさとは無縁の、ひやりと肌を撫でる冷気が、この室内には漂っている

無音の室内にカタカタとキーを打つ音が、驚くほど大音声で響いていた。

青白い光を放つパソコンの画面を食い入るように見つめる、双眸。

眼鏡の奥に二つの鳶色。

その眼光は獲物を捕らえる猛禽類のそれと酷似しているようで、そんな無音の世界で、静かに静かに、囁くような男の声が紡がれる。

「龍ヶ崎るち……へえ、果たして彼女は猫宮アギトと犬飼百哉にとつて幸運の女神か……それとも地獄へ導く死神か……」

唇の端を持ち上げて、鳶色の目が無邪気に笑った。

同時刻、国家上層部管轄の地下研究所　　M Gではたった五人の
研究員が慌しくフロアを駆けていた。

だが、一つの怒号が事態を急速に変化させる。

「ラパンツエ博士、大変です……我々のデータが何者かに、クラック
クされています……！」

顔面蒼白の研究員がラパンツエに不測の事態を知らせたのだ。
そう、M Gの核ともいえるメインサーバーに、何者かが不正侵入
しているのだ。鍵のかかったファイルは侵入者によって次々と開け
られ、M G側からは制御できずにいた。

フロア中央に設置されている、人の背丈を越す巨大なコンピュー
タは、誰かの手によって支配されていた。

「IPS作動しません、UTMも不能です……！」

「ダメです全システム、完全停止しています……！」

「外部侵入者がサーバーにログインするにはAES暗号を解読し

なければ……」

「世界最高峰のセキュリティ社すら解けない暗号を、どうして？
！」

「ステージ2も突破されました……このままでは……！ 博士！！」

普段呆れるほど会話の少ないフロアに、怒号が飛び交う。

その中で、ラパンツエ博士だけが開口せず、コンピュータの遠く
先に繋がる、顔も知らぬ人物を……睨める。

漠然と、ラパンツエは胸が疼くを感じた。

というのも、彼以外の研究員がまだ配属されていない頃、同じよ
うな事態が起こったのである。

「あの時と同じ人物なのか……？ それも、また破られた……？」

ラパンツエ博士は眉をひそめ、唇をきつく噛んだ。

ほんの一部分とは言え、国家の『秘密』が天才的なハッキング
いや、クラッキングの才能を持つ人物に紐解かれている。

ステージ1から5までの重要機密のうち、ファイアーウォール防護壁の一番少ないス
テージ1が、ごく短い時間で破られてしまった。多層防御と呼ばれ
る、侵入遅延とその発見において完璧なシステムが施されているに
も、かわらず。

完璧なはずのそれは、次の段階まで侵入を許すという、異常事態
が起こっているのだ。

緊迫するMG。

しかし、終わりは突如として訪れた。

戸惑い、対応に追われる研究員達の目の前で、消沈していた防御

システムが突然作動しだしたのだ。表示されていたページは恐るべきスピードで消え入り、瞬く間に火災は鎮火した。

ほっと胸をなでおろした研究員達は、不安を押し留め、即座に事の收拾に取り掛かった。

研究所が誇る、国家機密保持のための最高度セキュリティを二度も破った天才は、国の存亡を揺るがす悪魔か、はたまた国家の危機を救う救世主か

その頃、MGとは対極ともいえるほど薄暗く、薄気味悪い地下室で、男は満足げに薄く笑んでいた。青白い光源は男の秀麗な笑みさえも、ひどく冷然に映し出す。

「さて、“僕”という存在に気付いてくれただろうか」

掛けていた眼鏡をそつと外し、音もたてずに椅子から立ち上がると、パソコンのぼんやりした光を頼りに、人影は昏い部屋くらを抜け出した。

穏やかな男の声だけが室内に余韻を残し、未だ青白く光る画面には龍ヶ崎るちに関する個人情報のボックスが、幾重にも表示されたまま。

数秒後、画面は消沈し、もはや暗室には微光さえ残らなかった。

未だ落ち着くことのないMGのフロアで、ラパンツェだけが口を硬く結び、机に置かれたデスクトップ画面を見つめる。

(Est-ce que c'est vous?) 君なのか？

一呼吸おいて、彼の典雅な顔立ちが、僅かに歪んだ。

(hull) “ハル”

不安に揺らぐ青い目は、画面の向こう側にある人物を見た気がした。

ラパンツェには一人の人物の名が、脳裏をよぎったのだった。

それはラパンツェがこの研究所に初めて降り立った8年前、今日と同じように（技術は日々進歩し、改善されているが）侵入者は短時間でセキュリティを突破していった。

混乱するMGで、まだこの白衣に袖を通して数時間のラパンツェは、日本語も分からず、ただただ不安で動けずにいた。

怒号と叫喚が交じり合うなか、呆然と立ちすくむ若き研究員のすぐ横、長机の上に置かれ稼働しているパソコンの画面が、突如暗くなった。

そして、どういうことか、本来出現するはずのない、小さなボックスが現れたのだ。

若き研究員は、吸い込まれるように、椅子を引いて画面の前に座る。

今よりも輝きの強かった青い目は、画面の奥、その先に繋がる人物を探ろうと、じっとボックスを見つめる。

画面を見つめながら、滑らかにキーを叩いた。

Who are you?

その間に、一息つく間もなく、答えが返る。

Hello・My name is Hull・

これが、ラパンツェと「ハル」との出会いだった。

ラパンツェは、何事も無かったかのように正常化した機械を、刺すように見つめ。

国家最上級機密機関・MGという暗澹^{あんたん}の世界で、不安と希望と絶望を、想う。

暗澹世界に想う I I I（後書き）

「雛ハル同盟」第二弾。

とうとうハルを投入いたしました。作者と鏡美有雛さまが組んでいる同盟なので、知る方は少ないでしょうが。

長い道のりの物語ですが、どうぞ最後までお付き合いくださいませ。

黒雛 桜

円卓に座する三番目の役者 I（前書き）

お久しぶりです、黒雞です。

一ヶ月半ぶりの更新となりました。亀更新で申し訳ありません。<<では、よろしければ今回もアングラにお付き合ってください。

円卓に座する三番目の役者 I

まるい机に椅子は四つ。

ひとつの椅子は、あの子にあげよう。

もうひとつの椅子は、その子にあげよう。

みつつめの椅子は、だれにあげるの？

もう決まっているの。

一つ目の椅子と二つ目の椅子、三つ目の椅子と四つ目の椅子。

もうとっくに決まっているの。

椅子が埋まるのは、もうすぐね。

*

新緑の匂いを乗せて、心地良い風がそよぐ。

頬を撫でたのは、風に巻き上げられ、ふわりと踊った黒髪だった。

ゴシック調の白く、美しい外観　聖ローズクロス学園、校舎三階に位置する一年生の教室は日当たりもよく、窓際の席なら昼寝に最適である。

色鮮やかに木々が芽吹き始めたこの季節、ほんの少し窓を開けて、窓際中ほどの席に突っ伏す少女は気持ちよく寝息をたてていた。

深い眠りの中、頬をくすぐる感触は、より深く夢の世界へ誘う。

しかし、幸せそうに背中を丸める彼女を、下唇を噛みしめ、わな

なきながら見つめる者がいた。自身の薄毛と、一人娘の家出に頭を悩ます五十代後半の男性教諭。汚れ一つ無い白衣と、頭部がまぶしい。

黒板にびっしり化学式を書き込んでいた化学兼物理教諭の馬場は、授業開始から10分経過した現在、我慢の限界を迎えたらしい。彼のこめかみに浮かび上がる青筋が、何よりの証拠だ。

チョークを打ち鳴らす音の代わりに、黒板に押し付けられ、ごりごり砕かれていく音が響いた、そのとき。

「あゝん、るちはグリーンピース食べたくないつて、言ったのに」

謎の台詞が、静寂に包まれた教室内に響いたのだ。

声の主に一層鋭い視線を投げかけるも、馬場の敵意は相手に全く届いていない。むにやむにやと口を動かしているのか、ううん……

むふふ、などという幸せそうな声まで飛び出す始末。

悔しげに馬場は唇すばめ、鼻梁にしわを寄せた。

窓際中ほどで、机に伏せて眠るのは、出席番号35番、龍ヶ崎るち。

「起きなさい、龍ヶ崎」

教壇の上からできるだけ厳めしく、教師らしく喝を飛ばしてみても、机に伏せる敵はなかなか手強い。まったく起きる様子はないのだ。

周囲の生徒は毎度お馴染みの光景に声をひそめて笑いあい、攻防戦の火蓋が切られた瞬間から、席の近い者同士で雑談に花を咲かせていた。

馬場はますます唇を曲げて、鼻息荒く教壇を降りると窓際へと足

を進めた。

「起きろ、龍ヶ崎！」

今度は至近距離にて、精一杯吠えてみせる。

机の上で丸くなった背中が一瞬、びくりと跳ねた。それからもりと上体を起こした少女は、あちこちはねた髪も直さず、眠りを妨げた敵へとゆっくり首を回す。

半開きの目の中に浮かんだのは、自由を奪われた野生の獣と同じ眼光。そこに含まれるのは苛立ちに他ならぬ。

「……るちは野望のために日々、忙しいんです。どうして眠りを妨げるんですか……？」

まるで誰かを呪っているような、地鳴りのように低い声。

反論するちの言い分は、馬場にはまったく理解できなかった。教師とは生徒から敬われ、称えられる崇高なる職業であると信じていた彼にとって、目の前の生徒は彼の信念を揺るがす存在だった。龍ヶ崎るちの禍々しい上目遣いは信条を全否定している。

英語教諭も、数学教諭も、政治経済担当の教諭も最終的に叫ぶことは皆同じだった。

当たり前だが、馬場も彼らと同じ言葉を叫ぶのだ

「もう、なんでるちが寝てたらダメなのさ！ 授業受けたくないなら出てけとか、差別じゃない！ るち差別！」

雲少ない青空の下、中庭を歩くるちは拗ねるように唇を尖らせ、怒りをぶちまけていた。

誰に聞かせるでもない文句だけが、人気の無い学園の庭に響く。擦違う生徒が皆無なのは、当然ながら現在どのクラスも授業中という理由である。

教室を出て行けと言われたるちは、遠慮なくドアをくぐったのだ。そして、最近お気に入りのあの場所へと向かう。

「いーもんいーもーん。るちはあそこで優雅にセレブに昼寝をするもん」

本来は白色であるはずの、灰色がかったスカートを翻し、軽い足取りで向かった先は校舎裏にひっそりと広がる薔薇庭園。

生徒はおるか、教師も、用務員さえも近寄らぬ薔薇の楽園。
もしかすると、そこは人々に忘れられた楽園^{エデン}、なのかもしれない。

新緑の香りと共に、甘く馨^{かぐわ}しい花の匂いが風に乗ってやってきた。地面を敷き詰める背の高くなった芝から、石のタイルへと変わったとき、眼前には薔薇のアーチがるちを待ち構えていた。

石タイルの上をローファーがこつこつと音を鳴らし、彩り豊かな薔薇のトンネルを通る。

甘く穏やかな香りにほだされたのか、るちの表情はすっかりほころんでいた。

アーチを通り過ぎると、そのまま巨大な透明の建物へと向かう。ガラス張りのそこは温度管理の施された巨大な温室　もちろん、薔薇専用ではあるが。

大温室の入り口扉を引き開け、優雅でセレブな昼寝を興じようと、温室の中央へと踊り入る。

中央にはガゼボと呼ばれる、小洒落た八角形のやぐらが設けられ、そこには休憩用の円卓と四つの椅子が備わっているのだ。

「るちの秘密基地へ、GOー！」

ガゼボまで通じる石タイルをぴよんぴよん跳ねながら、勇んで最後の跳躍を終えた。

「にん！！」

「ハ？」

「うへ？」

るちの阿呆みみたいな掛け声と、間の抜けた二つの声が重なったのだ。

一段高くなったガゼボの床組みに飛び乗ったるちの前には、椅子に腰掛ける二人の男子生徒　それもよく見慣れた顔があった。

銀髪のもと、傷一つ見当たらない秀麗な顔立ちは微動だにせず、突如現れたるちへ不快の眼差しで見やる。

切れ長の瞳にはまる、燃えるような赤はどこか冷たく。そんな赤い双眸を持つ者は、猫宮アギト、彼ひとりしかない。

一方、テーブルに片肘を付きつつ、目をぱちくりさせているのは金髪金目の少年。突然の侵入者がちだと認識すると、硬くなった表情が一変、柔らかな笑みへと変貌した。

「よつす、るち。お前もサボリ？」

晴天のような笑顔を向けて、犬飼百哉はけらけらと笑ってみせた。

円卓に座する三番目の役者 I（後書き）

次話は11月末に更新する予定です。

円卓に座する三番目の役者 II

あの子はまだ、世界の底に溜まる^{よど}澱みを知らない。
虚像を見ている。

あの子はまだ、世界に残るわずかな希望を知らない。
だから道化を演じる。

あの子はまだ、世界の美しさと儚さを知らない。
だから仮面を被る。

そして自らを外界から疎隔^{そかく}する

「るちはお昼ご飯までここでセレブ寝したかったのに……なんでアギモがいるんですか」

椅子に座る二人の男子生徒 猫宮アギトと犬飼百哉を見下ろし、
子供が駄々をこねるようなふくれっ面でぼやくるち。この薔薇庭園
に先客がいたことがお気に召さないらしい。

「それは俺の台詞だ。なんでゲロ女が勝手に、ここに来るんだ」
「んまあ！ 猫宮さん家のお坊ちゃんは何で口汚いんざましょ！」
「……阿呆が」

切れ味鋭い、ナイフのような流し目を阿呆な少女に向けると、それきり口を閉ざすアギト。

止めの一撃を喰らい、るちは苦いとも酸っぱいとも言い難い表情を浮かべ、悔しさに齒噛みした。

見た目は王子でも中身は小姑だ

その事実を知っているのは、学園の女子生徒の中であるち唯ひとりである。

いつもの如く反論しようとして口を開いたとき、怒気を鎮めるような明るい声が響いた。

「るちも座れよ、イス空いてるしさあ」

「……むう、なんか釈然としませんが、いいですよ、るちは心が太平洋並みに広いから許してあげますっ」

下唇を噛んだままのるちだが、百哉に促されて渋々丸テーブルへと向かった。

銀髪の王子はツンとそっぽを向いて、一人ティーカップを口に運んでいる。

涼しげなアギトに恨めしい視線を投げて、るちは百哉の横の席、つまりはアギトの向かい側の椅子に腰を下ろした。

四つある椅子のうち三つが、今初めて 埋まったのだ。

「アギとモモはいつもここでサボってるんですか？」

テーブルの上に置かれたティーポットと、二人の前に置かれた、それぞれの湯気の立つ器 ティーカップとごつい湯のみを物欲しげに見つめ、るちは口を切った。

「まーな、体育以外の授業はクソつまんねえし」

頬杖をつき、湯のみをしつかり握りながら、勉強嫌いの学園アイドルはくすくす声を漏らす。百哉の言葉に間髪入れず続けたのは、学年首席の成績を誇る、アギト。

「本音は別にあるけどな」

鼻で笑って、ちらりとるちへと視線を投げた。

それはまるで、体の芯が凍りつくような、おそろしく、冷たい目だ。

その視線に刺される者は、誰であろうと底冷えするほどの寒さを恐怖を感じるはずだ。

しかし、例外としては百哉だけがアギトの眼光に免疫を持っていた。同じ痛みを共有する百哉だけが、本当のアギトを知っているのだ。

そして、例外がもう一人

「は、鼻で笑うなんて、さては！ るちをバカにしてるんですか、アギト？！ ムッキー！ この性格の悪さ、なっちゃんにいいふうしてやりますからっ」

底冷えなどする気配もない。

勝手に憤慨し、地団駄を踏む始末。

「あはは、そう怒んなって、牛乳飲んどけよ、るち。背も伸びるしさあ」

「モモまでっ！ るちのことをホビット族と呼ぶなんて、るち差別ですっ！ー！」

ホビット族　とは誰も呼んでいないが、からかって笑う百哉に、びしりと人差し指を突き出すちは、またしてもぶうと頬を膨らませていた。

そんな温室内に、あからさまなため息がひとつあがった。

いつもなら小鳥のさえずりが聞こえるほどの静寂に包まれた穏やかな大温室。

今日の喧騒はわずかな頭痛を覚えるほどだ。

嘆息をこぼしたアギトが切り出した。

「くだらない授業を受けたくない、というのが建前。本音は、至極簡単。仕事のために決まってるだろ」

るちのためにわざわざ説明するのも億劫おっくう、と言わんばかりに眉間にしわを寄せる。

「仕事……それって、つまるところモンスターが現れたら出勤しやすいように、ここで待機してるってことですよ？　ということは……この温室は秘密基地？！」

アギトの説明も虚しく、目を輝かせて独自の解釈を明言するのは、人並みはずれた精神構造の持ち主の少女。

半ば間違いではないため、否定も肯定もできない。アギトは軽い頭痛に額を押さえて、本日二度目の深いため息を、吐き出した。

暴風が去ったのは、午前の授業終了を知らせる鐘の音が鳴り終わってからだった。

時刻は午後12時40分。

三時限目の授業が終わり、昼休みへと移行する。

るちは意気揚々と大温室を出て、学園校舎へと向かった。昼食は決まって、なつちゃんと教室で食べるのだ。目的は、シエフが毎日腕を振るといふ、なつちゃんのお弁当。

おこぼれのためならば、猫宮先輩と犬飼先輩のカッコ良さを延々聞かされることすら、厭いとわない。

食後にその先輩を見に行こう、という誘いは、さすがに渋々といったところだが。

るちが親友のおかずを突いている頃、アギトと百哉は教室には戻っていなかった。

薔薇庭園の大温室にも、その姿はない。

向かった先は、贗物の光に満ちた、仄暗い世界。

円卓に座する三番目の役者 I I I

牢獄。

ろづごく？ 牢獄ってなあに？

罪人を入れておく所。または牢屋^{ロウヤ}。

悪い事をした人間は、ロウヤに入るのね。

そう、牢獄からは逃げられないの。

出口はすぐそこなの？

背負った罪と罰からは、逃げられないの

まばゆいライトが天井から降り注ぎ、目も眩むような白の空間。

組織が中間深度地下と呼ぶ国家機密機関、通称『MG』。
ミドルグラウンド

そこは誰も知ることの無い、深い深い地下に潜む巨大な研究施設。
縦長の内部は、陰湿さを微塵も感じさせぬ、汚^けれなき白で統一されている。自然の光が遮断された地下空間は、無機質な人口の光によって明度を保っていた。

まるで、牢獄だ。

地底の異常空間で休みなく働く、研究員の誰もが胸に抱く感想。
この牢獄から、一生出ることとはできないと、絶望して。

そんな場所に現れたのは、制服姿の男子学生二人。

エレベータから降り立ち、あきれるほど広い 常人の肉眼では四隅を目視できないほどの フロアに目を配る。背後で三枚扉の閉じる、重たい音だけが響いた。

整然と並ぶ数多のデスクは、どれも書類やバインダーが乱雑に乗り、埋もれるようにデスクトップ型のパソコンが配置されていた。視線を横に向けると、フロアの中心に設置された、天井に届か**ん**ばかりの巨大な機械 メインコンピュータが否応無しに飛び込んでくる。

その周囲を、このMGにたった五人しかいない研究員のうち、白衣姿の四人が忙しなく行き交っていた。

「オレらを呼び出しといて、出迎えナシって、どー思うよ。猫宮クン」

「別に出迎えなんて期待してないだろ」

気だるい表情を浮かべて文句をばやく相棒に、一瞥もくれず冷然と言い放つ。

床を縦横無尽に走る配線の束を跨いで、自分たちを呼び出した人物のデスクへと向かった。

「あ、うさびょん博士みつけ」

ほどなく進んで、メインコンピュータを背にするような配置のデスクに、色素の薄いウェーブがかった金髪・白衣の後姿を見つけた学生の一。

資料と本が山積みになり、埋没しているようなパソコンと睨みあう異国の青年。彼こそがこのMGの責任者であり、『バグ』の研究に従事する、博士たる人物。

背後の気配に気付きながらも、人工的な光を放つ画面の文字を、碧眼が忙しなく追った。

終わりの見えない仕事に、ひたすらキーボードを叩くのは、白磁のような長い指。

なかなか振り向く様子のない彼に、痺れを切らした男子生徒の一人、猫宮アギトが口を切る。

「ラパンツエ博士」

短く、鋭い口調に、画面を名残惜しそうに見つめてから、白衣の青年　ラパンツエはキーボードを叩く指を休めた。

そして、くるとチェアーをまわして二人に向き合う。

優しい青い双眸が、悲しそうに笑った。

「ごめんネ、急に呼び出しテ」

「仕事じゃねーのに、MGに呼ぶの珍しくね？」

「用件は何です？　無線ではなく、直接話があるだなんて」

頭の後ろで指を組み合わせ、面倒事は御免、と言わんばかりに唇を尖らせる百哉に対し、アギトは平板な口調で、躊躇ためらい無く直球を投じた。

「無線だと、傍受されるおそれがあるカラ……あの人から呼び出される前二……早めに、言っておいた方がいいと思っテ」

椅子に座ったまま、ラパンツエは二人を憂いげな瞳で見つめ、流暢な日本語で続けた。

「対象、D-Xのことなんだケド……組織の監視連中が苛立つてるみたいだヨ、あまり勝手な行動は控えさせた方がイイ。ちょっとした発言にも気をつけさせテ。上層部は容赦なく排除命令を下すだろうカラ」

ラパンツエが『D-X』と比喻した対象

「るちのことかよ」

面白くなさそうに、吐き捨てる百哉。龍ヶ崎るちという一人の間を、記号で呼ぶことが気に食わないのだろうか。

記号化された人間の、その命の価値は、国家という大きな枠の中では、あまりにも薄い。

百哉の苛立ちをすぐさま察したラパンツエは、穏やかに言葉を紡いだ。

「百哉、ごめんネ。そう、るちちゃんの事。気をつけて、鮫島は情など持たない男ダ……自分の手を汚さず、君たちを平気で使ウ」

ラパンツエの表情は真摯そのもの。

鮫島、という人物の名を口にしてから、次第に声は小さくなっていき、今にも消え入りそう。語尾に含まれていたのは、嫌悪か、恐怖か。

常に我々が監視していることをお忘れなく

アギトの脳裏にフラッシュバックされる、低く重い男の声。

転瞬、その男の声が背後で響いた。

「おや、これから特派に召集をかけようと思っていたのですが、こんなところにいましたか」

円卓に座する三番目の役者 I V

それは、無垢^{むく}なる光。

それは、清澄^{せいちょう}なる光。

そこには、怒りも憎しみも、憤りさえ、ない。

その光は

嘲笑を含む、低く、重たい声がアギトの脳内と鼓膜を同時に震わせた。

刹那、学生二人と博士は声の出所へ鋭く振り向き、思わず目を瞠^{みは}る。

エレベータから現れたのは、暗色の背広に身を包んだ、どこか硬い雰囲気をもとう長身の男。

国家上層部と、ごく一部の人間だけがその存在を知る組織。

彼こそがその組織幹部 鯨島である。

三十歳という若さで、十数人の部下を従える幹部にまで登りつめた野心家は、不敵に唇を捲^{めく}った。

まるで見計らったように現れた鯨島。その場にいたラパンツエ以外の研究員たちは、驚愕と緊張に足が止まっていた。それはまるで、メデューサを見てしまったかのような。

電子音に混じり、寂^{せきはく}寞としたフロアに響くのは、一定の歩調を刻む革靴の音。

配線を跨いで、博士と特派の少年二人のもとへ歩み寄るや、高校二年の男子を見下ろす形で、鮫島は肉食魚に似た狡猾な光を向け、「君たちと行動を共にしてもらい、秘密保持に徹する、ということ対象D-Xの処分は保留としましたが、あまり派手な動きをされずには困りますね。特派員の御二方には、ちゃんとD-Xの躰けをお願いしているはずですが……」

嘲るように口を切った。
アギトと百哉を交互に見やる眼光は、まるで血に飢えた獰猛なるサメのようで。

そして、二人の背後で座るラパンツェにも、薄気味悪い光を向ける。今にも飲み込まれそうな威圧感をその身に浴びて、博士はそつと俯いた。

当のアギトは、けっして友好的とは言えない眼差しを鮫島へ送り、百哉に至っては、あからさまに眉根を寄せ、舌打ちまでする始末。

「アンタに言われなくても、こっちで見てるっつーの」

「そういうことだ。今まで龍ヶ崎の監視はしてきたが、アレは人畜無害に等しい。まあアンタの有難い忠告は受け取っておくが」

ひどく、ひどく静かな火花が、MGに散った。

緊張の糸が張り詰めるフロア内は、他の研究員達の配慮によって

物音一つ響かず、じりじり酸素が奪われてゆく感覚に満ちていた。

そんな静寂を破ったのは、他ならぬ鮫島である。

忌々しげに鼻を鳴らし、

「LCA、LCD、……常に我々が監視していることをお忘れなく」

冷然と一言告げ、一顧^{いつこ}だにせずフロアを直進してゆく。鮫島はそのまま、MGコンコース側面に位置する、別室の扉の中へと消えていった。

彼が残していった冷たい余韻は、ラパンツエを沈黙させ、百哉に苛立ちを与え、アギトに一片の憤りを眉根に刻ませた。

息が詰るような地下から、甘い香りが広がる地上へ。

不快感を胸に抱きつつ、二人は再び薔薇庭園の温室へと戻ってきた。

肺に溜まった酸素をすべて出し切るように、ガゼボの中央でアギトと百哉は深く息を吐くのだった。

地下へ向かう度、地上の空気が、どれほどましかと思ひ知らされる。

欺瞞^{ぎまん}と虚栄と陰謀が充満した、地下空間。

二人にとってその空間は、通気孔を全て塞いだ檻の中に等しい。

百哉は思い出したようにブレザーのポケットをまさぐると、折りたたみ式の携帯電話をパチリと開く。

ディスプレイを見つめた瞬間、大きな目が更に大きく見開いた。

「げっ、もう昼休み終わっちゃうじゃん」

時刻は昼休み終了五分前。

渋い表情で整った眉をハの字に下げ、しょんぼりうな垂れながら携帯電話をブレザーのポケットへと滑らせた。

ぶーっ。

突如、ブタの鼻息が側から響き、丸テーブルに目を移した二人は、ぎよっと息を呑む。

腕を投げ出した形で、ぐってりテーブルに突っ伏す、見知った人物がそこにいたのだ。

死んでいるように見えるが、おそらく夢の世界に旅立っているのだろう。

ボサボサのショートカットに、薄汚れの制服、目を凝らすとスカーートのひだがほつれている……そんな人物は一人しか知らない。

「ゲロ女……」

「あらら？ つーか、さつきるち、教室に戻ったはずじゃ……」

呆れた口調でアギトが言うと、苦笑気味に百哉が付け足す。
そんな二人をよそに、当の本人、るちはぶーぶー寝息をたててい

た。

顔を見合わせてから、仕方ない、といった表情を浮かべてアギトと百哉は円卓の椅子を引いた。所定の位置に腰を下ろす二人の表情に、嫌悪の色は些^さ少^{しょう}たりとも浮かんではない。

あくびひとつすると、金髪の後で指を組み合わせ目を瞑る。

すっかり空になったティーポットの隣に、そつと置いてあった文庫本を手にとると、ぱらりとページをめくる細く長い指。

どうやらこの二人、午後の授業も出席するつもりは、ないらしい。

薔薇庭園にも、新緑の涼風がそよいでいた。

温度管理のなされた大温室には、午後の爽やかな風は届かないが、穏やかな太陽光をガラス張りの天井から浴びて、アギトは目を細め、百哉は浅い眠りに落ち始めていた。

深い眠りの中で、るちは夢でも見ているのだろうか、無垢なる笑みがひとつ、浮かぶ。

いつも空席だったその場所は、今日からるちの席となった。

薔薇庭園の円卓に四つの椅子、一つを除いた席が、今日埋まったのだ。

円卓に座する三番目の役者 I V（後書き）

これにてこの章は終わりです。
次回から百載の話に入ります。

夢中の邂逅、つつつの邂逅 I（前書き）

またしても更新が遅れてしまいました。

お詫び申し上げます＞＜。

少し長めの章に入りますが、どうぞお付き合いください。

夢中の邂逅、うつつの邂逅 I

たった一つの犠牲で、欲しかった力が手に入る。
ヒトは、地位と名誉と権力が好き。

手放すだけで、とっても簡単なの。
お手軽、おてがる。だって『譲渡』であって、『放棄』ではないものね。

一つの犠牲で、大きな偽りの力を得た権力者。それが一生自分の影に付きまとうと、気付いているのかしら。

おろかな権力者は、その影がいつか自分を呪うと、気付くかしら。

＊

「はあ、胃が痛い……」

セント
聖ローズクロス学園の職員室に入ってきた、毛髪の寂しい教諭。
授業が終っても浮かぬ表情で、とぼとぼ自分の机へと向かった。

「どうされたんです？ 顔色が優れないようですが……」

声を掛けられ、化学兼物理担当の馬場は腹部を擦りながら、曇った顔をあげた。

目の前にあったのは、まだ見慣れぬ美女の顔。心配そうに声を

かけたのは、四月に着任したばかりの数学教諭、辰巳愛理菜である。たつみえりな
首を傾げた拍子に、一つにくくった亜麻色の髪がふわりと揺れた。
次の授業で使用するプリントの束を手に、馬場のもとへと歩み寄る。

灰色のパンツスーツを着こなす様は、大学を卒業したばかりとは思えぬほど、教師という肩書きに良く栄えていた。

辰巳の綺麗な顔をぼーっと見つめていた馬場は、我に返ると慌てて目を泳がせてみた。おほん、と咳払いを一つしてから、

「いえね、私が担当する2・Bなんですが、毎回毎回例のあの二人が早退、欠席してまして……とくにガラの悪い方なんて、私のことをハゲって……。今日も一人は欠席、もう一人は珍しく出席かと思えば、パラパラ漫画描いてたし……。もうイヤだ」

目頭に薄っすら光るものを浮かばせて、馬場はガツクリ肩を落とした。

周囲の教師たちも、ああ、と納得したのか頷くのみ。

「そ、そんなに不真面目な生徒がいらっしゃるんですか？」

「辰巳先生はまだご存知ないんでしたっけ」

悲壮感を漂わせる馬場に代わって言葉を継いだのは、苦笑を浮かべた現国の女性教諭だった。

連なった机の中ほどに視線を向けて、新米の彼女は素直にこくりと頷いた。

「あのクラスを担当すると、本当に胃が痛くなるんですよえ」

「分かります。授業が始まってすぐに出て行くこともありますしね」

「強く言えないのが腹立たいですよ、単位だってこっちで帳尻合

わせなきやいけないんですし」

「あの金髪に至っては我々を馬鹿にした態度ばかりですし、あいつがドアや机を蹴るたびに心臓が縮まりますよ」

職員室に集まった教師達が口々に不平不満をもらしだした。彼らにとって、『例の二人』は相当厄介な存在らしい。

「私、Aクラス担当なのでよく分らないんですが……誰なんですか？ その問題の生徒二人って」

長い睫毛をぱちぱちしながら、辰巳は浮かない表情の教師達をゆっくり見回した。

誰もが重たい息を吐き出している。

「猫宮アギトと犬飼百哉ですよ。あの『東宮化学工業』社長の息子と、警視総監の息子。われわれにとっての癌みたなもんです」

東宮化学工業といえば、精密化学品の製造において、国内屈指の大企業ではないか。

警視総監といえば、警視庁の頂点に君臨する人物を指す。

どちらも高名な家柄だ。

更に重苦しさを増した職員室内。

唇に親指を軽く当てる癖を無意識に行って、一人納得のいかない辰巳が口を切る。

「どうして二人だけ特別扱いするんです？ この学園はその二人に限らず、有名企業のご子息や新東大を受ける優秀な生徒ばかりじゃないですか」

ひとりの教諭が言葉を継いだ。

「今や大企業の東宮化学工業は、学園に毎年寄付をしてくれてるお得意さんなんですよ、なにやら元々学園とつながりがあるみたいでね。その息子の猫宮を処罰でもすれば、我々教師は首を切られてしまう。警視庁トップの息子なんて、特にだ。犬飼が不祥事を起こすたびに警察が揉み消しているし……赤点、単位不足で留年なんてさせてもしたら、我々教師に圧がかかるのは目に見えていますよ」

教員達にとって、二人の身勝手な行動を黙認することが、暗黙の了解となっているのだ。

それが卒業まで続くと考えると、ため息をこぼさずにはいられない。

全くもって面倒な生徒だ、と一同はどんより視線を落とした。

なるほど、他の生徒と一線を引いている理由は、自分達の保身か。辰巳は未だ胃の辺りを擦る馬場を横目で一瞥し、ふう、と短い嘆息をこぼした。

「るちい、一生のお願いっ！　ここの答え教えてっ」

両方の掌をぱん、と合わせて頭を下げているのは、るちの親友、なっちゃんであった。

二時限目が始まる前の十分間が勝負である。

「なっちゃん、るちはそんなに甘くないわけよ。どんなに悩殺上目遣いされても、るちは揺るがないよっ」

一つの机に向かい合い、かたや頭を下げて懇願し、かたや偉そうに腕組みをしつつ申し出を断っている。口をへの字に曲げたるちは巖の精神でどっかり椅子に背中を預け、珍しく親友を陰阻けんそな目つきで見つめた。二人に挟まれて置かれているのは、一枚の数学のプリント。

「分かった。じゃー今日は、北海道佐佐呂間産の車海老を使ったエビチリ、プラス、デザートの杏仁豆腐もつけるからあゝ」

「ここの答えは $y = x + 5$ であります！」

……身の翻し方は見事と言うしかない……。

けっして、なっちゃんなつちゃんの甘ったるい声に折れたわけではない。

あえて言うならば、魚介類の名産地である佐佐呂間のエビと中華のシエフが作るスイーツのコンビに、巖の精神があっさり砕かれたためである。

「もうるち、アンタってこういう時は頼りになるのよね。ってゆうか、エリカ先生の授業だと、答えられなかったらネチネチ解答するから、やなのよねえ」

先ほどまでしおらしく頭を下げていたなっちゃんなつちゃんは、もうすでにいつもの横柄な態度に戻っていた。椅子の背もたれにふんぞり返り、脚まで組む始末。唇を尖らせて肩を竦めてみせた。

一方のるちは、なっちゃんなつちゃんの話など上の空。

お昼ごはんの妄想でもしているのか、ニマニマと口元に薄笑いを浮かべていた。

「あーあ、朝はまた猫宮先輩と犬飼先輩、見れなかったしいー。今の休み時間はおかげさまで潰れちゃったしい、三、四限目は移動教室だから二階に寄れないしいー。サイアクだわ」

妄想の世界から戻ってきたるちは、親友を慰めるいい言葉を閃き、口を切る。

「ネコ先輩とわんこ先輩見たって、屁のツツパリにもならないよお」
「ねえ、るち。アンタそういえば最近先輩達と普通に仲良いけど、なんで?!」

いきなり頭をスパンと叩かれたるちは、言葉と言動のかみ合わない親友に、潤んだ黒真珠を向けた。
「なんでと言われましても……」。

「えと、えと……、それはゲロをきっかけに」

るちは平手を喰らった頭を擦りつつ、アギトと百哉との出会いを、面白おかしく語ろうとしたときだった。

夢中の邂逅、つつつの邂逅 II（前書き）

更新予定日よりかなり遅れてしまい、申し訳ありません。今回
今回は三千文字弱で、II、IIIと暗い描写になっていきますの
で、ご注意ください。

夢中の邂逅、うつつの邂逅 II

ある日のある夢の話を知りたい？

ききたい、聞きたい。夢ってどんな？

真つ暗闇の中で、人間の姿から毛むくじらの怪物になっちゃうの。こわい、こわーい。人間じゃなくなっちゃうね。

そう、人間としての道徳と理性が失われたとき、ヒトにはもう戻れない。

こわい、こわい夢。そんなゆめは、みたくないね。

「おいコラ、るち！」

教卓側のドアから、怒声とも聞き取れる大音声があがった。それも名指しである。

教室内のざわめきはびたりと止み、ひやりとした静寂が訪れる。視線は一挙にドアへと注がれた。

数多の視線を浴びても動じることなく、開け放ったドアに背を預けて立っていたのは、学園のアイドル的存在　犬飼百哉^{いぬかもちや}。

「い、いつ、犬飼センパイっ！」

なっちゃんの上擦った声の直後、黄色い歓声が一気に沸き起こり、室内温度が微妙に上昇した……気がしなくもない。

女子生徒はほぼ全員席を立ち、我先にドアへ詰め寄った。

……無論、なっちゃんも例外ではない。

ただ一人、席に座ったままの女子生徒は、まずい、と慌てて明後日のほうに視線を彷徨わせていた。百哉は唯一駆け寄ってこない女子生徒　るちを、人垣越しに見やった。

笑んでいるようにも見える鋭くつり上った口角が、るちには襲い掛かる寸前の獣に見えていた。いつもは穏やかな朝日に似た金眼が、今や、砂漠を照らす灼熱の太陽光のように殺気を孕んでいる。

今にも唸り声の聞こえそうな表情で、百哉がガンを飛ばしているではないか。

それはもちろん、るち宛だ。

『しゃべったら　ヤキだかな』

口で言わずとも、目が語っていた。

先日、鮫島からのプレッシャーもあり、組織の目が厳しくなった今、るちの監視役となった特派員は、彼女の軽はずみな言動を野放しにすることはできないのだ。

たとえ、るちが親友に国家機密を洩らしたところで返ってくる言葉が、ばっかじゃないの、の一言だけであつたとしても、だ。

百哉が1-Aを通りかかったのは、偶然だろうか。

授業開始直前の、密度の高い教室内で暴かれそうになった国家機密。漏洩が阻まれたのは、偶然だろうか。

否。

まったく、目を離すとこれだもんな

世話の焼ける“仲間”のために、偶然を装うのだ。

そんな時。

二時限目の本鈴が学園中に響き渡る。るちにとっては天の助けに感じたことであろう。

女子生徒たちが散らばってゆく中、百哉は背後の気配に気付き、ちらりとるちから視線を外して、やって来る人物に目を移した。

「はい、みんな席についてー。授業始めまーす」

廊下から声があがった。甲高くなく、それでいてハツとさせられる強い響きを持った綺麗な声音。女性にしてはなかなかの長身で、その身長に見合った美しいプロポーション。

数学教諭の辰巳愛理奈^{たつみえりな}

百哉はくるりと踵を返し、擦違う辰巳を一瞥。

辰巳の茶味を帯びた瞳と、百哉の金色の瞳が交錯する。

それは、一瞬の交わり。

ぴり、と目に見えない電波を感じたように。漠然とした緊張が百哉の中に走った。

気の合わない相手だと、獣の本能が知らせるのだ。

だが、それは一瞬の交わり。他者との無駄な係わり合いを避けるように、百哉は視線を外した。その行動すらも、本能的な判断から来るものなのだ。

辰巳の横をするりと抜けて、金髪の男子生徒はよたよたと廊下を歩み始める。

金髪の生徒　警視總監の息子、犬飼百哉……。
小さくなってゆく後姿をひっそり見送って、辰巳愛理奈は1 - A
のドアをくぐった。

「なんだ、遅いから次の授業も出るのかと思ったぜ？」

「まっさかあ。次、政経なの知ってて言ってる？　オレ政治とか大
嫌いなもの知ってんじゃないかよ」

「知ってる」

「うっわ、もちよいさあ、親友を労わってほしいんすけど……」

薔薇の甘い香りが漂う中、活字でびっしり埋まった文庫本に目を
やるアギトと、丸テーブルに突っ伏す百哉は、二時限目の政治経済
の授業を例の如くボイコットしていた。

「……政治も、権力者も、みんな嫌いだ。ついでに勉強も」

ぽつりと呟かれた言葉に、アギトはそっと百哉を見つめる。

顔こを見えないが、きつと唇をゆがめているのだろう、と案を
めぐらせ、手元に再び視線を落とした。

脳裏に霞んで映し出される人物。

その猛禽類に似た鋭い眼差しだけがはつきり確認でき、寒気を覚
える。

警視庁のトップに君臨する権力者　父の姿を思い出し、百哉は
その幻を振り払うように、硬く目を瞑った。

その日。雲のかからぬ澄んだ夜空に、橙色のまるい月浮かんだ。不気味な色に染まる月がこうこうと燃えて、地上を照らしていた。

長い夜に、うとうととまぶたを閉じる。

一夜のうちに浅い眠りを幾度も繰り返す百哉にとって、太陽が失せ、闇夜が支配する間は昼間と違って不安なものに感じられた。

幼い頃は月のない夜に怯え、一睡もせず夜を明かす。光のない常闇の空が自分を飲み込んでしまうように思えて、恐ろしかった。

月のある夜は睡魔が襲う。星や月の輝きを見つけては安堵のため息を吐き出し、獣のような短い眠りに就く。

だが、その度に見る悪夢に恐怖した。

それはあの日から、百哉が16歳になった今でも、続いているのだ。

そう、平凡な日常が蹂躪された、あの日から。

今日の月は、やけに明るい。

自室のベッドで仰向けになり、まぶたの表面に月光が降り注ぐのを感じ、ひとりごちた。

閉じていたまぶたをゆっくり持ち上げて、思考がうつうつと覚醒し始めたのを感じる。

(……ああ、またここか)

ちらと左右を見回し、見飽きた光景に軽く肩を落とした。

(この夢、久々だな)

天も地も、全てが黒。

百哉の佇むこの場所は、上下左右全て黒で塗られた夢の世界だった。

ふと背後に気配を感じてゆっくりと振り向く。そこに誰がいるのかも、知っていた。何度も何度も、同じ悪夢を見てきたのだから。発光するものが何ひとつない空間で、百哉の前に現れた人物の姿は鮮明に輪郭を形取っていた。

暗色のスーツが鎧のように思えるほど、隆々とした体躯。オールバックに固めた黒髪と、厳めしい表情。眉間に刻む皺と猛禽に似た双眸。見るものを自然と萎縮させる男が、傲然と屹立していた。

（オヤジ……）

突如出現した父親を見つけた瞬間から、鼓動が早まるのを感じた。焦燥にも、憤怒にも似た感情が胸の中に渦巻く。

まるで蠟人形が置いてあるかのように、口を開かず、微動だにしない父親。

しかし、その鷹のような眼光だけは、確かに百哉を見つめていた。息子を見つめるその目に浮かんだのは、慕情でもなく慈愛でもなく、嫌悪の色。

（何でそんな目で見るんだよ……）

まるで舞台のシナリオのように、黒塗りの世界では同じ人物が現れ、同じ台詞を口にし、同じ展開を演じる。

百哉自身、その一連の流れに逆らうことはできない。この世界から逃げ出すことも、シナリオを変える事も叶わないのだ。

（なんで、化け物を見るような目で、オレを見るんだよ……！）

胸を締め付けるような苦痛が、湧いたように襲い来る。
鳴り止まぬ早鐘が脳に響く。

憤りを吐き出すほどに、それらは増してゆく。

悲しみが溜まって溢れるのは、あつという間。
。

暗闇の静寂の中、父からの返答はない。

百哉の荒かった呼気はいつの間にか、周囲を包む静寂と同化して
いた。

熱気は沈静し、こころを覆う氷の膜。

胸はもう、痛みも苦しみも感じない。

金の瞳に、残酷な獣が目を覚ますだけ。

一歩。

暗闇を歩む。

また一歩。

贗物の世界に屹立する父の首を見つめ、ゆっくりと腕を伸ばした。

夢中の邂逅、うつつの邂逅 I I I

漆黒すなわち闇

闇を怖れてはいけない。

漆黒は宇宙にあり、深海にあり、地中に潜む。

けれども真の闇は、そこに存在しないのを知っている？

ほんとうの闇は、ヒトのこころの中。

気付かないだけで、いつもある。

あの子たちは気付いているかしら。

きつと、とつくに気付いているわ。

三百六十度黒色の空間は、広大な世界に見えて、地面も天井も左右の壁もある、ちっぽけな世界なのかもしれない。

それは、

悲しみがすぐに溢れ出してしまう、彼のちっぽけなこころと、同じなのかもしれない

線が細いとは言いがたい、喧嘩に慣れた指。

それが目の前の太い首に触れた、瞬間だった。

どん、と響いた鈍い音は、黒塗りの世界に余韻を残さず吸い込まれてゆく。

獲物を捕らえた獣は、動きを封じるために足元の平面上へ叩きつけ、凶悪なまでの力で眼下の首を締め付けた。

馬乗りになって男を見つめる少年の表情は、ぞっとするほど冷えきっている。

男は抵抗することなく、じいっと少年を見上げるだけ。

あれほど怖れていた存在である男の生命^{いのち}が、自分の右手の中にある。右手に握られている。その事実気付いて少年は唇をゆがめた。愉快だ、とでもいわんばかりに。

嘲るように見下ろし、首筋に少しずつ指をめり込ませる。

人間としての理性が薄れ始めていることに、気付いてはいなかった。

獲物は酸素を求めているのか口が一、二度開閉するのみで、相変わらず無抵抗のまま身を横たえている。しかし、目だけは鮮烈な光を帯びていた。

……その光は、嫌悪。

(……アンタと同じで、そう……、オレもアンタが嫌いだ)

静かに、硬く呟く。

幼い頃、厳しい態度に怖れてはいたが、必ず良い部分を褒めてくれる父親が好きだった。好きだったはずだ。

その感情は“あの日”を境に消え失せ、憎悪が少年のこころを蝕

んだ。

畏怖^{いふ}という名の感情だけを残して、一切が憎しみへ変貌する。

だが、凍った心は己の理性を抑制していた“怖れ”を、麻痺させてしまったのだ。

この黒塗りの世界で膨らむ憎悪が、指先のわずかな痙攣さえも気付かせなかった。

いつも少年がみせる、太陽に似た笑みは姿をくらませ、あるのは冷えきった、残酷で陰りのある表情。

（殺してやる……）

血走ったまなこを向け、指に圧を加えてゆく。

頸骨の軋む音が聞こえる。酸素が欠乏しているのは、土気色に変わった肌で見て取れた。だが、なおも少年を射る眼光は鋭い。

（オレをこんな風にしたのは）

獣は唸るように呟いた。

体重を乗せ、もう片方の手を首に、当てた。
。

ゴキッ。

肉の絞められる音と、鈍い音が一つ鳴った。

馬乗りになったまま、消沈した男をしばし見下ろす少年。

完全に瞳孔が開いた亡骸から離れると、引き締めた唇にゆったり

弧を描いた。さも可笑しげに薄く笑う。

（オレをこんなにしたのは、アンタじゃねーか……）

横たわる男から、一步、二歩と後ずさる。

怖れていた存在は、もういない。

憎くて怖くて、許すことの出来ない男を、とうとう殺してやった。自然と込み上がる笑みを隠さず、くつくつと喉が歌う。

踵を返して闇を歩き出そうとした　刹那。

「化け物め」

不意に背後で響いた重低音の、声。

それは少年が幼い頃から怖れ続けてきた、声だった。

振り向くと、そこには今しがた殺したはずの男が佇立しているではないか。

あの眼光が、再び少年に向いている。

恐怖か、怒りか、憎しみか。

思考が止まった。

獣のように、本能だけが百哉の体を突き動かす　。

（……オヤジ……）

百哉が気付いたときには、未だ眼前に仁王立ちする父の姿が

あった。

立派な立ち姿は、周囲の誰もが景仰^{けいこう}する警視総監という肩書きに相応しいのだろう。

しかしそんな肩書きよりも、『百哉の父親』という肩書きの方が好きだった。

足元の黒に転がる父の首を見つめて、ふとそんな事を思う。その首から流れ出る鮮やかな赤が、足元を染め上げ始めた。首を失くした身体は血飛沫を噴き上げながら、ゆっくり崩れ落ちた。

再び訪れた静寂の空間に聞こえた、梅雨を思わせる旋律。

赤い雫は、黒の世界にしとしとと降り注ぐ。

(どうしてだよ。なんでだよ……)

今にも泣き出しそうな弱々しい声は、もはや狂気の欠片さえも無く。

指先の痙攣に気付いて、だらんと垂れた腕に視線を落とすと、真っ赤な右手がそこに、あった。

(……どうして、なんで！ オレを、権力と引き換えに差し出したんだよ！)

喉^{のど}を迸^{はな}る絶叫は、怒号か、哀切の叫びか。

(オレをこんな化け物にしたのは、アンタだろ！！)

黒塗りの世界 浅い眠りの中で生まれる夢にて、今宵百哉は百九度目の血の雨を浴びた。

この世界はひたすらに黒い。
それは、真の闇。

「モ……百！」

スチール製の扉の向こうから聞こえる、聞きなれた声に、素早く
瞼をもたげる。

ベッドから半身を起こし、ぐるりと室内を見渡した。百哉が生活
する学園寮の、百哉の自室。

カーテンの敷かれぬ窓から深夜の月が黒い空を照らすのが、見
えた。

「百！ 何やってる！」

再び扉の向こうから、相棒の切迫した声が響いてきた。寝静まる
寮棟に配慮しているのだろう、百哉でなければ聞き取れないほど声
はひそめられているのだが。

相棒の棘ある口調に、さすがに急がねばまずいな、とベッドを降
りた。

フローリングの床をぺたぺた歩き、ルームドアを開け玄関へと向
かい、ドアスコープも確認せず、扉にかかるチェーンを素早く引く。
確認する必要などない。こうして深夜にわざわざ起こしてくれる、
少しっけんどうな人物は彼の相棒しかいないのだ。

扉を押し開け、にっと笑んでみせる。

「おっす、アギ」

「……遅い、さっさと片付けにいくぞ」

不機嫌に腕を組みながら、相棒　猫宮アギトは吐き捨てた。

薄手の長袖Ｔシャツに、緩めの黒いズボンといった起き抜けの格好は、“仕事”が急に入った証拠である。常時制服の内側に忍ばせるホルスターではなく、今は急遽持ち出したナイロン製のホルスターを腰下に巻き、そこに収まるは銀の装飾銃。

こんな時でも、白い手袋は両手にしっかりとめられているが。

一言告げると、百哉の返事を待たずに駆け出し、あっという間に視界から遠ざかってゆく。

「へーへー、今、行きますよー」

気だるげな表情で、よたよたドアを出る。

半袖のＴシャツ、スポーツブランドのジャージにスニーカーというラフな格好のまま、寮の廊下に立つや、一切のモーションを省いて、硬い大理石の床を蹴り上げた。

あっという間に数百メートル先に移動する。

疾駆の先は、彼らの狩場。

百哉が薔薇庭園に着いたころ、アギトは大温室の、ガゼボの中央で鍵を開けていた。ガゼボは月光を浴びて、さながらスポットライトを照らされた舞台のよう。

ぽつかりと開いた、悪魔の口に似た地下への入り口。ゆるく螺旋を描いた階段は、底を見ることは叶わない。

最初の数段を除いて、あとは暗さを増してゆくばかり。

相棒が慌てて温室内に飛び込んできたところで、交わされるアイコンタクト。

アギトは、落ちるように、入り口へ足を踏み入れる。次いで、十数秒遅れで百哉が入り口へ飛び込んだ。

彼らは、夜よりも暗い世界へと、向かうのだ。

夢中の邂逅、つつつの邂逅 I V

地下に閉じ込められた存在を知ってる？
なあに、なあに？ 悪いものかしら。

ヒトが生み出した悪いもの。欠陥あるもの。
ヒトにだって欠陥はあるのにな。

そう、だからヒトから生み出されたものは欠陥があるの。

なんて愚かかしら。

美しい薔薇の彫刻をあしらった、エレベーター高速稼働昇降機で最下層まで降ると、二人の眼前に広がったのは、トンネルのような、仄暗い空間であつた。

頭上から注ぐ微量の光が、薄気味悪い地下によく映える。

「指定ポイントは？」

硬質な地面を蹴り上げながら、先を疾走する銀髪の相棒に問いかけた。

「第7セクE89・F31だ。指定時刻35秒オーバーだぞ」

淡々と述べる相棒の声音こわねには、僅かに百戦を責めるような刺が含

まれていた。

多少なりと己に非があると自覚していた百哉は、苦笑　実際のところ、百哉に全て非があるのだが。

先行するアギトは、更に速度を上げる。

見る者がいたとしたら、それは魔術的な瞬間移動に見えるであろう。

一瞬で百哉の視界から、銀髪の後姿が掻き消えていた。

「35秒か……ま、それくらいなら」

唇を三日月形に割って、白い八重歯を覗かせる。刹那、百哉の金眼が獰猛な光を帯びた。

疾駆のさなか“変化”が始まったのだ。

突如背中と腕が波打ち、皮下で何かが這いずり、蠢うごめいているように。異常な隆起をみせる四肢の筋肉。

足音しか響かぬ地下道に、骨の擦れ合う、または砕けあうおぞましき音が重なった。

着用していたシャツやズボンが、波打つ肉体の中に飲み込まれていくと同時に、皮膚から湧き上がるように暗色の獣毛が伸び始めたのだ。

それが全身に行き渡ると、白い歯は鋭さと長さを増し、もはや八重歯とは言い難い。

犬歯、と呼ぶべきだろう。

飢えた野生の狼のような　貪欲な色をその金眼に浮かべ、前脚が地面を踏んだ。

鋭利な爪は硬い地面を抉って、加速の力をもたらした。

これを、ラパンツエ博士ないし、組織の者達は“獣化じゅうつか”と呼ぶ。心優しき博士は、百哉だけの特別な力に、敬意を払って。

国家機密を握る者達は、残忍な化け物の力に、侮蔑と畏怖を込めて。

かかる圧にも、獣化を経た体は軽い。
その獣は音速をもつて前に進む。

「L C A……目標ポイントに到着しました。バグの殲滅行動に移行しました」

「L C D、も目標ポイントに到着。定刻一秒前です、すでに獣化を終えて殲滅行動に移行」

「赤外線暗視カメラと熱線映像式暗視カメラを1番・2番モニターに送ります」

次々と飛び交う声高の報告に、音の無い、巨大スクリーンの前に佇む白衣の男は頷いた。

「博士、五体中一体が完全消沈。内部破損率4%です」

「戦闘が終了し次第、自動修復作業機を投入します。第7セクターE、F防護扉前二ヶ所に配備完了」

画面上に映し出される、暗視カメラが捉えた不気味な化け物の影は四つ。

一丁の銃を片手に握る影が一つ。

化け物と同じか、それ以上に醜悪な姿をかたちどる、狼に似た大型獣の影が一つ。

アンダーグラウンド
最大深度地下、通称U Gと呼ぶ巨大地下空間に、重く乾いた轟音

が鳴り響く。同時に、背筋が粟立つような、不気味な金切り声が広い空間内に響き渡った。

連続する轟音の正体は捕らえた獲物を粉碎する破壊力を持つ、45口径の装飾銃。グリスリー・ウィンマク

オートマチックの巨大拳銃を片手で繰るのは、冷え冷えとする赤目を持つ蹂躞者。

暗闇でバグの頭部に狙いを定めると、グリスリーはけたたましい咆哮をあげた。

その破壊音とは別に、骨肉を引き裂く無骨な音が響く。

UGに何百と存在する明かりの乏しい小部屋、そこで繰り広げられる血生臭い破壊。

硬い鱗に覆われた、巨躯の猿にそっくりな、バグという名の化け物。

それらを仕留める狩人は、バグ以上の化け物と言うべきか？

長い腕が喰いちぎられ、鋭い牙を剥き出しにしたまま頭部が転がり、臓物は撒き散らされ、獲物バグは暗い虚空を仰ぐ。

低い唸り声とともに、獲物の心臓を引きずり出し、口にくわえた金眼の獣が、残骸の中に屹立している。

バグの血の味が、獣の 百哉の口腔内でじわりと広がった。

（生臭くて、相変わらず気持ちわりーな）

頭を振って、啜えた化け物の臓器を吐き出す。

どちらりと、気味の悪い音が、破碎音に混じって百哉の耳に届いた。

（あと一体、天井か……）

肉眼では確認できない暗室に潜む化け物を、金の眼が追った。
あれらを、殺すのが自分達、特派員の役割だ。
闇の中で動けるのは、化け物たちだけなのだ。

（暗闇で動けんのが、てめえらだけだと……おも ……）

暗室の天井を仰ぎ見ながら、突如思考が止まった。

（ここが『闇』……？ ちがう）

（ちがう……）

（ここじゃ、ない……）

上下左右、全て黒塗りの世界。
赤い雨の降る、虚しい空間。
あそこそが、百哉にとっての、真の闇。

（なんだ、これ ？）

ぐらりと視界が捻じ曲がったように、感じた 。

「は、博士……！ LCD が……」
赤外線カメラに映し出された映像を、モニター越しに見つめる研究員のひとりが、呆気にとられた声をあげる。

モニターには、ぴくりとも動かない獣　百哉が映っている。
戦闘の最中、置物のようにその場で固まっているのだ。

「どうしたというんだ……致命傷を受けたのですか？」

「いえ、バグからの攻撃によるダメージは確認されていません」

「なら、一体……？」

ただ見守ることしかできぬMGの研究員達と博士は、不安に揺らぐ瞳で、モニターを食い入るように見つめるのみ。

彼らが戦場へ赴くことは、できないのだ。

そこは、人間達ではなく、化け物達だけの戦場なのだから。

きらり、と発色するものがあつた。アギトと同じ紅い色の瞳が、強い光を放つ。

緩やかに弧を描く天井に張り付く奇怪な怪物　バグは、真下で寸分も動かなくなった獣を見るや、絶好の好機と捉えたのか、足に力を込め、垂直に落下した。

狙うは、自分達の敵である金眼の獣。

歯をむき出しにし、鋭利な五本の爪を振りかざし、獣の頭上に迫る。

夢中の邂逅、うつつの邂逅 V

この世でたったひとつ、怖れるものがあるのを知っている？
知らない、知らない、怖れているものってなあに？

ヒトは、親を、父を怖れるの。

どうして、どうして？ 優しいお父さんもいるのに？

ヒトは、父の偉大さを知れば、こころのどこかで怖れずには
……。 いられないのね。

と、ズボンのポケットから手品のように取り出した弾倉を、
コンマ単位で速度で、空になっカートリッジに差し込むアギト。が
ちん、と噛み合う甲高い音が響いたと同時に、二発の轟音が響いた。
45口径の口から吐き出された黄金の軌道は、真っ直ぐ伸びてゆく。

肉の粉碎される小気味良い音の上に、断末魔の叫び声が重なった。

熊をも穿つ大型拳銃は、グリスリー・ウィンマゲバグの頭部を、まるで林檎を握りつ
ぶすように、砕き、散らしたのだ。追い討ちをかけるように胸部へ
突き進んだ銃弾。

真横からの強襲に、宙に浮いていたバグの体がくの字に折れ曲が
り、弾き飛ばされる。

無情にも、頭部のみならず心臓さえも、形を残さなかった。

頭を潰され臓器を抉られた化け物は、ただの肉塊と成り果て、冷たい地面にべちゃりと落ちた。

奇怪な金切り声も、断末魔の叫びも、グリズリーの咆哮も、背筋を凍らす獣の慟哭^{どうく}さえ　今は静寂の中に沈んでいる。

「何やつてる、殺^やられるところだったんだぞ！　聞いているのか、百！！」

珍しく怒声をあげるアギトの瞳には、表情とは裏腹に不安と安堵の色が浮かんでいた。

百哉に怪我がなくてよかった。そう優しく声を掛けられるほど、アギトは器用ではなかった。

そして、戦闘の最中、こころがここになかった百哉に、一抹の不安を覚えた。今までにこんなことはなかったはずだ……。

相棒のがなり声に、どこか遠くを見つめていた金眼が、ゆっくりその相棒へと向く。

（　いま、オレはどこに、いた……？）

眉間にしわを寄せる相棒をまじまじ見つめ、自分に問う。

周囲をのろのろ見回すと、戦いはすでに鎮火した後であった。

MGで監視する博士に、任務終了の旨をインカムから飛ばし、特派員は地上を目指した。

煌々と燃ゆる夜空の光を浴びて、二人は薔薇庭園を後にする。

朝日に出会うのは、まだ数時間先のようだ。

珍しく雲ひとつからぬ澄んだ月夜。

しかし地上では目の眩む人工の光がひしめきあっていた。

車のライトが交錯する歩道を、深夜一人きりで少年が歩いている。金髪の下顔はどうも冴えず、ぼんやりと足を動かしているだけだった。

深い眠りを必要としない獣と同じく、彼にも安らかな眠りというのは無縁のもの。

全くすっかり化け物じみてるな、と卑屈に笑い、近くのコンビニから聞こえる喧騒に目をやった。

男女のもつれだろうか？

体格のいい男が細身の女に詰め寄り、男の仲間らしき数人が怒号を飛ばす。

くだらない、とジャージのポケットに手をつ突っ込みながらそのまま立ち去ろうと足を進める百哉。

「姦すぞ、クソアマアッ！」

男の声が深夜の騒音よりも高く響いた時、

「つたくもー……サカリやがって……」

呆れたため息を一つついて、百哉は踵を返した。

あの夢を見たためか、はたまた先ほどの仕事が不完全燃焼に終わったためか、または、長くて退屈な夜のせいかな　　ようは虫の居所が悪いのだ。

華奢な女の腕を掴み取り、今にも殴りかからんばかりに、拳を握る巨体の男。

と、背中を指で突かれる感触に、男は背後へゆっくりと首を回した。

「ンだあ？ クソガキ」

背後に立つ金髪の少年へ浴びせる、ドスを効かせた声が、言い切らぬうちに途切れた。

「ブギヤツ！」

下から空を斬るような掌底が、男の下顎を打ち砕く。

潰された蛙に似た呻き声をあげて、顎を押さえながらよろめく巨体。

側にいた女はチャンスとばかりに逃げ去っていった。

突然の暴行に目を剥く仲間達はありつたけの汚い言葉を吐き出し、少年に襲い掛かる。

大振りのパンチは百哉にとって子供が腕を振り回しているのと大差ない。

軽く交わし、空振ってつんのめる男の後頭部に裏拳を叩き込む。

ナイフを取り出した仲間の男と、どこから持ってきたのか鉄パイプを構えるもう一人の男。

なりふり構わず百哉へ詰め寄った。

「すんなりお家へ帰りゃ、手加減してやってもいいけどオ？」

金の眼がニヤツと笑ったように見え、武器を構える男達の足が震

えだす。

勇気を振り絞るように、奇声を発しながら男達は飛び掛った。

「……で、コンビ二前を重傷者で埋め尽くさせたわけか」

聖ローズクロス学園2・Bで、頬杖をつきながら猫宮アギトは気のない声で呟いた。

「ちよつちやり過ぎたのは、ある」

「ちよつとどころじゃないだろ、一般人相手に」

「んなこと言ったってさあ……」

ばつが悪いのか、犬飼百哉は机に顔を埋めて呻いた。

HRが始まる前は学園の王子二人を一目見ようと、ドア付近は生徒の人垣で溢れているのだが……。いつもなら黄色い声が鳴り止まないはずの時間、それが急にピタリと止まったのだ。

突如、ドアを叩きつけるように開けて入って来る者があつた。

その音に驚いたアギトと百哉は、瞬時に音の方へ視線を向ける。

瞬間、背に稲妻が奔ったような衝撃を覚える百哉。

喉の奥に引つかかる様な……息の詰ったような小さな悲鳴が口から漏れ出す。

「……あ……」

奥歯が微かに痙攣し始める。

胸の奥に憎悪と思しき感情が沸き起こる。

彼の太陽に似た笑顔は消え去り、闇夜よりも昏い陰影が取って代わる。

「オヤジ……！」

そう、教室に現れたのは百哉が恐れ、憎しみ、忌み嫌う人物

警視庁警視總監 犬飼千幹 ちから 百哉の父親、その人物であった。

緊張の波が一気に押し寄せ、窒息しそうなほど重い空気が漂った。百哉にとって、数秒間の沈黙が数時間にさえ思える。

先に静寂の帳を破ったのは犬飼千幹の方だ。

「ついて来なさい」

聞く者の腹に響くような重低音の声帯。

黒々とした髪をオールバックで固め、彫りの深い面立ち、年を感じさせぬ屈強な肉体、そして見るものを萎縮させる研ぎ澄まされた眼光……まさに、警視庁組織の頂点に君臨するに相応しい人物だろう。

百哉は無言で父の言葉に従い、席を立つと教室のドアへと向かう。いつもは余裕たっぷりの百哉に、緊張で強張った後姿がうかがえた。ドアを閉める前、アギトに、構わず、撃て。

声には出さず、唇だけが微動する。

その一言を相棒へ残し、静まり返った教室内をあとにした。

夢中の邂逅、うつつの邂逅 VI

悪魔の微笑ってどんな風かしら。
知らない、知らない。悪魔は笑うかしら？

魔女の微笑ってどんな風かしら。
知らない、知らない。魔女って微笑むかしら？

きつと優雅に微笑むわ、そして。
きつと残酷に微笑むのね。

始業の本鈴が鳴り響く学園、屋上にもその音は届いていた。
新緑の香りを乗せながら、柔らかな風は少年の金髪を揺らす。
初夏の空が鮮やかに映え、のどかな陽射しは、対面する親子の影を伸ばすのみ。

厳めしくスーツを着込んだ男には不釣合いの場所であろうか。
元々ある眉間のしわをさらに深く刻み、警視総監が重い口を開いた。

「また、面倒を起こしてくれたみたいだな」
「……ハッ、すみませんね。警視総監殿」
「お前が痛めつけてくれた相手の一人は、警視庁OBのお孫さんだ」
「……おエライのお坊ちゃんが夜遊びつてのは、どこかと思いきすが」

平然とした顔で軽口を叩いてみせたが、百哉の背筋には氷のように冷たい汗が伝った。

「わたしの顔に何度泥を塗れば気が済むんだ」

「……そのたびに揉み消してきたんだろ」

到底三年ぶりに再会する親子の会話とは思えない、温かみを欠いた問答。

息子の屁理屈が、冷静さを保とうと努める父　犬飼千幹の琴線に触れる。

百哉は、猛禽類に似た眼光が自分に向けられた時、心臓を握りつぶされるような感覚に襲われていた。

怖い。

恐い。

こわい……。

自分の中の理性が目の前の男に、父に怯えている。

自身の中の力をもってすれば、父と言えど簡単に首をひねることができる。

だが、現実には16歳の自分に、「父」という存在はまだ、越えられない。

幼い頃に植えつけられた圧倒的な存在感。悪戯はもちろん、失敗には必ず手が飛んで来た。

父が自分に向かって微笑むなど、あったかどうか覚えてすらいない。

いつも猛禽に似た双眸が、刃よりも鋭く鋭く、光っていた。

だから、こわい。

自然と奥歯が鳴り、指先の痙攣が止まらず、地に張り付いた如く足が動かない。

百哉はその切迫した空気の中、ただ立っているだけで精一杯だった。

ここはうつつ。

夢の中と似て非なる場所。

「相変わらずのようだな……犬飼家の恥さらしめ」

再び聞こえる重低音の声には、軽蔑と嫌悪の感情のみが込められて、息子へ贈られた。

吐き捨てるように、下等な生物を見下すように……。

（オレをこんなにしたのは、アンタじゃないか……）

目を瞑り、心の中で絶叫する犬飼百哉。

目を瞑ると、足元に浮かび上がって広がるあの、黒の世界。闇がじわりと百哉の世界を侵し始めた。

（オレは、アンタにとって何なんだよ……！）

その叫びは、今にも泣き出しそうな、悲痛な叫び。夢の中のみならず、現にもあの闇が迫っていた。

（アンタが、オレを！）

（実験体^{ラット}に、差し出したんだろ！！）

全身の毛が逆立つような、血が逆流していくような　そんな感覚に陥る。

速まる心音、熱せられた血液、牙え渡る思考。

血が滲むほどきつく閉じられた唇。

黒塗りの世界が、うつつまでも飲み込もうとしている。

犬飼百哉の人間としての理性が崩れ始めていることに、気付けない。思考が麻痺しているのだ。

沈黙する息子を訝しげに見つめる父は、音をたてて奥歯を擦り合わせた。

化け物め

少年の耳朵^{じだ}に、そんな言葉が聞こえた気がした。

ブッン。

瞬間。

ナニかの事切れる音が、百哉の脳髓まで響き渡った。
人間としての、大事な　ナニか。

血走った金の眼に、殺気^{はし}が奔る。

ひどく静まり返った鼓動、枯渴したような喉の渴き、思考が薄れゆく。

それは理性の崩落の始まりを、意味していた。
父への恐怖を感じるよりも、もっと大きな何かが胸のうちに湧いた。

今百哉を支配しているものは……純粹なる殺意。

眼前に立ちはだかる獲物の咽笛を掻き切り、血飛沫をあげ、悶絶、息のあるうちに臓物を引きずり出し、えぐり取り、そして、殺す。

それは間違いなく、憎悪と傷心が生み出すおぞましき感情

心地よい風が吹き抜ける聖ローズクロス学園の屋上、長閑な陽射しのもとで獣が動き出した。

犬飼千幹が気付いた時はすでに百哉は身を屈め、視界から消えていた。

その体勢から鞭のようにしなる腕。
ナイフと見紛う鋭利な手刀を備え、獲物の頸動脈めがけて一気に襲い掛かる。

次の瞬間には間違いなく胴体から首が転げ落ち、断面から鮮血が噴出するであろう。

獲物が驚愕に満ちた眼を剥いた。
一秒先の未来を想像し、獣が笑んだ。

刹那。

轟音を噛み殺して、一発の銃弾が獣と獲物の間を奔った。

手刀は首元から、わずか数ミリのところで留まり、犬飼千幹の体に傷一つ付くことはなかったのだ。

屈強な肉体が血飛沫をあげることはなかったが、かわりに一瞬で噴き出た汗が額からこめかみへと流れ落ちる。

警視總監の険しかった眼差しに、はじめて翳^{かげ}りが生まれた。今まで微動だにすることのなかった精神と肉体。

理解できない事態を目の当たりにし、膝がゆっくりと崩れ落ちる。

凶刃をゆっくり下ろし、金髪の頭をもたげて少年はのろりと立ち上がった。

失いかけた人間としての理性が、やっと少年のもとへ帰還する。

だが太陽のような笑顔は連れ立って帰還することはなかった。一歩二歩とよるめきながら後退し、膝を折る父に焦点を合わせる。

大きな目を更に大きく見開き、金色の瞳が揺れた。

殺そうとした。

夢と同じように。

あの悪夢と同じように、殺そうとしたのだ。

胸のうちに、苦味を感じた。

それは、嫌悪という名の、苦汁だろう。

「ああああーッ」

長閑な陽射しが降り注ぐ屋上に響いたのは、獣の咆哮か。あるいは怪物の慟哭か、または……人の号叫か。

大気を震わす音が止んで、しばらくすると屋上から校舎へ続く階段を降りる者があった。金髪の頭を垂れ、俯いた表情が読み取れない。

その階段中ほどに、愛用の銃から消音機を丁寧サイレンサーに外す銀髪の学生が立っている。

アギトは目線を合わせることもなく、淡々と作業を続ける。同じく百哉も目線を落としたまま、一步一步階段を降った。

「アギ、もし、オレの理性が完全になくなっちまったら……今度は、構わずオレを、撃てよ……」

擦違いざま、アギトの耳に届いたものは、百哉の切なる願いだった。

現実世界で父親を手にかけてしまったとき、彼の人間としての理性は脆く崩れ落ちるだろう。

そして理性を失えば、あとは化け物としてその牙をふるうのみ。

彼の怒りは、彼自身を破滅させる。

百哉が去って、風の吹きつけるさやかな音だけが聞こえる屋上に、男は立ち上がることができず、膝を折ったままだった。

自分を殺そうと襲撃してきたものに、戦慄を覚えずにはいられなかった。

男は苦悶の表情を浮かべ、擦れた声で呻く。

「……化け物め……」

その深い皺を刻む眉間は、侮蔑と恐怖に歪んでいた……。

一時限目の終鈴が鳴り響く中、授業から解放され、ざわめきを取り戻す学園内。

数学の授業を終えた1 - Aにも活気が戻る。その中で、誰よりも素早く席を立ち上がり、猛然とドアを指して進む者がいた。

龍ヶ崎るちである。

意を決したような形相を浮かべて勇ましいこと、この上ないのだが。

どうも内股気味なのが気になるところだ。

ドアに手をかけようとしたまさにそのとき。

「あ、ねえ龍ヶ崎さん」

涼やかに声をかける者があつたのだ。

「な、なんですか」

「こないだ教室に来てた男の子……二年生の犬飼君でしょ？ 仲いいんだ」

「そ、そりゃあ……モモとるちは、親密な関係ですからっ」

心なしに青い顔で頷くるちに、辰巳愛理奈は『親密な関係』のフレーズを聞いて、女子高生のように目を輝かせた。いつもの伶俐な表情と一変、頬をほころばせる。

学園で人気なんでしょう、かつこいいものね。と笑ってからかう辰巳に、愛想笑を一つ浮かべて、るちはその場を逃げ去った。教室から脱兎の如く走り去ったのは、百哉と自分の関係について深く追求されるのを怖れたためではない。

あえて言う……激しい尿意に、理性が勝るか、敗れるかの瀬戸際　つまりは、ちびりそうだったのだ。

内股でなんとかこらえ、小走りで女子トイレへ向かうるちの後姿を、哀れみの眼差しで見つめる辰巳。

「龍ヶ崎、るち……」

視線を外し長い睫毛を伏せて呟く。

「犬飼百哉と『親密な関係』……？ あなたはまだあの子のこと、何ひとつ分かってないのよ。何ひとつ……」

ふっくらした唇に親指を当てて、誰にも聞こえないようにひとりごちた。

微笑む様は、さながら、酷薄な笑みを浮かべる、魔女のよう。

「仲間、なんて思わない方がいいわ、龍ヶ崎さん……いえ、『D - X』」

夢中の邂逅、うつつの邂逅　V I（後書き）

更新が大幅に遅れてしまい……申し訳ありませんでした（ぺこり
やつと百哉のターンが終わりました。親子の暗い話でしたが、自分へ
の戒めも込めて執筆しました。

物語は中盤ですが、最後までお付き合いくださると光栄です。（
黒雛）

舞い降りる白鷺のうた I

らん、らん、らん

どんな物事にも起源がある、種がある、始まりがあるの。

それは一体なにかしら？

それは誰も知らないの。

まるでツルばらのように、どんどん広がって、広がっていく。
でもいつかは終わりがくるの。
始まることは、終わりに向かっていること。

らん、らん、らん

*

「博士、どうです、先のサイバーアタックの件について、何か得られましたか？」

「いえ……残念ながら手掛かりはありませんでしタ」

おそろしいほど冷めた視線をラパンツエ博士に向けて、鮫島は無表情に問いただした。

頭の中で顔の見えない『ハル』を思い浮かべ、用意していた言葉を述べたラパンツエ。

「では、昨日地上でLCD^{うえ}が暴走しかけた、と小耳にはさみまし

だが、もしそれが事実だとしたら……博士に動いてもらわねばいけません」

「……我々の方にそういった情報八届いております……今日おこなったLCA、LCDのメンタルチェックも、問題八ありませんでシタ」

あからさまな動揺に、鮫島は苦笑を隠しながら、そうですか、と短く切った。

博士の顔色が優れないことは一目瞭然。

昨日百哉の取った行動は、組織の者が監視しているため、当然、MGの代表であるラパンツェにも、上層幹部である鮫島の耳にも届いていた。

だが、鮫島はあえてこの心優しい博士に問いただしたのだ。弱った獲物をなぶるように。

特派員に精神異常が見られるなら、問答無用の生体実験が行われる。

バグとの戦闘によるものか、またはウイルスによって体が蝕まれ始めたか、それを分析するために、かつてと同じ苦痛を強いるのだ。今朝のメンタルチェックで通常よりも高い数値を出した百哉。

身体的変化はなかったが、やはり、精神面での異常が残滓として画面上に表れた。

だが、博士は真実を口にしない。

「では、引き続き研究を続けてください。バグ根絶の糸口が見つかるのを、期待しておりますよ」

酷薄な笑みを浮かべ、鮫島は昇降機へと歩き出す。

彼の部下達三名が昇降機前に控えており、鮫島とともにすぐ乗り込むと、重たい三枚扉の向こうに消えていった。

ラパンツエはじわりと額に浮かんだ汗を手の甲で拭い、誰にも気付かれないよう、深く息を吐き出した。

「人々から隔離されタこの歪んだ世界も、あの子たちの未来も存在も、貴方の野心が全てを捻じ曲げタ……こんなことは終らせなければいけないデス……鹿賀^{かが}教授、あなたの生み出した世界ハ……間違っテイル」

昇降機の中で携帯が振動し、鮫島は通話ボタンを押して、常の低く硬い声で答えた。

『鮫島君、ラパンツエ博士はどうでした？』

「はい、やはり組織への忠誠が薄れているようです。それが過大していくようなら、また手を打つべきかと」

『そうですね。ああ、そういえば、博士には妹さんと弟さんが残っていましたね。ご両親に続き、妹弟どちらかを不運な事故で亡くしたとあれば、我々組織に従事することでしょう』

耳に響いた声は、まるでせせら笑っているようにも聞こえる。

意地悪く、それでいてとびきり甘く告げたのだ。

暴君の忠実な犬は、その主の冷笑を耳にしながら、口の端をつり上げる。

「ええ、きつとそうなれば博士は我々に快く協力してくれるでしょう。まあ、もう少し様子を見えます」

『よろしく頼みますよ、鮫島君』

「はい、失礼します。辰巳司令……」

電話の奥に響く上司の、甘く香る声を耳に残して、鮫島は通話を切った。

穏やかな陽射しが差し込む薔薇庭園。

学園で最も美しいこの薔薇の城は、ただただひっそり色鮮やかな花卉をひろげ、蜜の香しい誘惑を風に乗せるのみ。誰一人その存在価値を見出せる者はいない。

三人の生徒を除いて。

昼下がり、薔薇庭園の大温室では、優雅なクラシック曲が流れていた。

「アゝギ、こんなんじゃ眠くなんだろう？ もっとさあ、リップとかバンプとか」

上品な雰囲気をぶち壊す、駄々っ子の文句が温室にわんわんと響く。

薔薇庭園の中央に位置するガゼボは、快適にくつろぐための、ゴシック調テーブルとイスが備え付けられている。薔薇たちを引き立たせるために、控えめに置かれたそれらは、見事に庭園と調和を図っているのだ。

丸いテーブルを囲んで、三人の男女が各々午後一のサボりを満喫していた。

声を上げたのは犬飼百哉、学園のアイドル的存在。

温室に流れるクラシック曲がお気に召さないのか、文句を連呼。
テーブルに突っ伏して、小学生張りに自己主張。

「うるさい。嫌なら出て行けいいだろ」

そんな百哉を一瞥もせず、手に持つ文庫本を淡々と繰るのは、優
美な容姿かつ冷淡な口調の学生、猫宮アギト。

百哉と同じく学園の王子的存在。

未だ精神が不安定にもかかわらず、それを隠して明るく振舞う百
哉に、アギトはいつもの態度で応えた。

「モモ、彼女に無理言わないで下さい！ 彼女……蓄音機ちゃんは
現代邦楽を知らないんですから！」

妙な言い回しで説明してくる声の主。

どこぞから持ってきたのか蓄音機を温室に設置した張本人である。
アギトと百哉のこころうちなど知る由もない。

「アギがレコードを持ってきてくれなかったら、蓄音機ちゃんはた
だのラッパ付き木箱だったんですよ?! 表彰モンです!」

凡人には、いや、一般的な大衆には理解しがたいこの発想。

薔薇庭園のガゼボでサボる紅一点、龍ヶ崎るち、彼女である。

喧々囂々たる討論が繰り広げられる午後の庭園。

三人にとって、最高のサボり場である。

不意に、聞き慣れない声が温室に響いた。

「こんにちは、生徒諸君」

高くもなく、低くもない、心地良い声色。
その響きは薔薇のようにほのかに甘く。

学園の片隅にひっそり広がる薔薇庭園に、生徒がやって来るはず
はない、教師でさえもここへは足を運ばないのだ。

なら、一体誰が？

三人は一斉に温室入り口へ振り向いた。

扉口に立っていたのは、生徒でも教師でもなく　　。

ノーネクタイのダークスーツに身を包んだ、長身の青年。

前髪を多く造り、黒髪が全体をさらに重く印象付けていた。

やんわり微笑むと、およそ二十代半ばであろう顔立ちから一転、
少年のような無邪気さが覗える。

「誰だ、アンタ。ここは学園の関係者以外立ち入り禁止だぜ」

棘を含ませ、アギトが青年を睥睨する。
へいげい

（永田町か……）

男の上着の襟穴に、ラベルホール金バッチがくくり付けられているのを見逃さ
なかった。

青年はアギトの気迫に気圧されたのか、眉をへの字に下げて頬を
軽く指で掻きながら口を開いた。

「確かに、僕は生徒じゃないけど……『関係者』ってことで多めに

見てくれるかな？ この学園のOBなんだ」

言い終えると促すように軽く首を傾げる青年、柔らかい物腰とは裏腹に、その蔦色の瞳は全てを見透かし、捕らえ、射抜くような…鋭利な光を宿していた。

舞い降りる白鷺のうた II

らん、らん、らん

悪いニンゲン善いニンゲン、本当は分かれてなんていないの。
ニンゲンは、人間という一つの類でしかないものね。

ヒトの中に善悪どちらもあって、どちらも欠けてはいけない。
どっちも必ず持っているものね。

どちらを大事にするかが、大事なの。
ニンゲンってめんどろね。

らん、らん、らん

「OB……おにーさん、学園の元・生徒ってことですか」
「そ」

黒真珠のような、まん丸の目を何度もしばたかせ、るちは好奇の
眼差しを青年に向けた。

しかし、アギトと百哉は椅子に腰掛けたまま、扉口に立つ青年を
訝しんでいる。

突然現れた青年の言葉を、信用することはできなかった。

いや、正確には、突然現れたから信用できない そういった明
瞭な理由ではなく。

青年の瞳の奥に潜む違和感。温和そうな顔立ちとは裏腹に、鋭くも昏い瞳が油断なく三人をみつめた。

研ぎ澄まされた感覚を持つ二人の少年にとって、警戒するには十分たる理由だった。

何より、金バッジを付けているという事は、政府関係者と見て間違いないだろう。アギトと百哉にとって、信用すべきではない種類の人間に他ならない。

彼らを『特派員』なる存在に仕立て上げたのは……そういう人間達なのだから。

「どーもはじめまして、龍ヶ崎るちです。将来の職業は錬金術師です」

「あはは、面白いね、キミ。僕は『ハル』、よろしくねー」

誰も聞いていない将来の夢を暴露する少女。

大温室に満ちた重圧を微塵も感じていないるちは、社交辞令も含んだ笑顔で青年　ハルを円卓へ招いた。

間の抜けた、いや、少しずれたるちの自己紹介をなんら気にする風でもなく、ハルは微笑を浮かべている。丸テーブルを囲むアギト、百哉、るちを順に眺め回し、最後に空席へ目をやった。

今まで誰も座ることのなかった椅子。

これは舞台のために用意された椅子。

椅子は終焉を演じる役者を待っていた。

その椅子をゆっくり引くと、彼は悠然と身を沈めた。

薔薇庭園の四つ目の椅子に、主^{あるじ}が現れた。

「『ハル』、何の用？ こーみえてもオレら忙しんだよねえ」

挑発的な色を帯びる金の目。

頬杖をつきながら、白々しい言葉を並べて百哉は相手の出方を窺った。

「……へえ。午後の授業が始まってる最中、温室^{たむろ}なんかで屯^{たむろ}するこ
とが、犬飼百哉にとって忙しいことなのかな？」

ハルの目が、口元と同時にフツと嗤った。

刹那、百哉の全身に悪寒が走り抜けた。

心臓を鷲掴みにするような、視線。双眸には悪意を孕むような光。
全てを見透かし、絡めとるような昏い瞳^{くら}。そんな不気味さも相まっ
て、百哉は喉の奥に言葉が詰るのを感じた。

「……どうして名乗ってもいない百^{モモ}の名を知っている……誰だ、貴
様……！」

百哉に代わって冷然とした声を上げたのは、他ならぬアギト。

一気に緊張の糸が張り詰める。

アギトは左手を後腰にまわすと、マグナムのグリップをきつく握
った。

（なんなんだ、こいつは……血がザワつく……善くないものだと本
能が喚いている……）

アギトの真紅の瞳に、バグと対峙するとき芽生える狂気が、僅かに宿った。

破壊の衝動がふつつと沸き起こる。

それは、敵へ対する本能。

円卓に腰掛ける、少女を除く三者の視線が静かに火花を散らした。アギトと百哉は、無言のプレッシャーがじわりとのし掛かって来るのを、その身で感じていた。

緊張の糸など見えていないるちは、一人手を叩き、「すごい、ハルさんはエスパーですね」と口走る始末……。当然、両サイドに座る二人の学生は、反応を返すはずもなかったが。

「あのね」

突然響く、その場にそぐわないゆつたりとした声。

ハルがくすりと笑って、唇を動かした。

組んだ両手の指を、ゆっくりと顎下に置き、真意の見えない鳶色の瞳を少年達へ向ける。

「僕はキミらの全てを知ってる。何もかも。猫宮アギトと犬飼百哉が受けた人体実験も、悪魔のウイルスも、みんな、みんな」

それは唄うような、呪詛のような。

舞い降りる白鷺のうた I I I I

らん、らん、らん

鷺はうたう

鷺は舞い降りる

らんらん、らん

昔、鷺は白かった

今は誰も知らない分からない

鷺は昔、白かった

らん、らん、らん

ハルのゆつたりとした声に、二人の少年は背筋に戦慄が走った。
楽しげに口ずさんだ、詩のような言葉は、国家がひた隠す秘密。
一般人が知ってはいけない恐るべき秘密。
アギトと百哉が命を賭して守ってきた、秘密 。

電流を思わせる衝撃が心臓に迸り、瞬時に脳へと伝っていった。
だが、それは都合の良いことに、アギトを動かすためのトリガーとなっただ。

山猫のように素早く立ち上がり、ゼロコンマの速さでマグナムを

抜き取ると、向かい合う青年に禍々しい銃口を向ける。
ハルは未だ顎の下で両指を組み、微笑を湛えていた。

引き金が軋もうとした、その時。

「引くと」

呪うような、うたうような。

今度は昏い笑みを浮かべて、嗤うハル。

「引くと、後悔するよ？ キミらをそんな体にした『教授』の居所も、永遠に闇の中だ」

アギトの人差し指が反発したように、引き金から弾き飛んだ。

グリズリーを構える左手が小刻みに震えだす。真紅の瞳が、揺れる。いや、揺さぶられた。

「アイツは死んだって聞いた……。居場所だって？ ふざけんなよ……！！」

抑えきれない感情が暴発したように、テーブルに拳を叩きつけ、傲然と立ち上がった百哉。しかし、相手は口元に笑みを浮かべたまま、見上げて言葉を続ける。

「犬飼百哉、僕はなんでも知ってるって言っただろう？ 信じる信じてないは、キミたちの自由だけれど」

否定も、肯定もできなかった。

『教授』はアギトと百哉にとって、憎むべき人物。だが、死んだと聞かされてきた。どんなに憎くとも、生存していなければこの怨

嗟の情をぶつけることはできない。

それが、生きている？

……嘘だ。

組織は、もうどうすることもできない、と自分達に言ったのだ。

『教授』を失っては、どうすることもできない。

自分達は、もう二度と、ベッドの中で深い眠りについたり、誰とも壁をつくらず生きることが、できなくなったのだ。

『教授』は、後悔と自責の念の暗く重たい力に、勝てなかった。自分達に恐ろしい運命を背負わせて、死んだ。

……だが、組織からそう『聞かされてきた』だけなのだ。
ずっと、ずっと。

しばらく沈黙がその場を支配していた。しかし、その沈黙を生み出した人物によって、終止符が打たれようとしていた。

ハルは物分りの悪い子供を前にしたように、頭をゆっくり振って、小さなため息を吐き出す。

「仕方ない、学園の王子様二人の機嫌を損ねてしまったようだし、僕は帰るとするよ」

「　　っ、待て、てめえにやまだ聞きたいことが　　」

百哉が退席しようとして腰を上げたハルに、掴みかかるうとした時だった。

静謐な空気をまとい、獲物にグリスリーを向けたままのアギトが、片腕で百哉を制したのだ。

口を閉じたまま、『やめろ』と言っていた。

奥歯を軋ませ、百哉は今にも唸り声を上げそんな表情を浮かべながら、伸ばした手をゆっくり下ろす。

「んんー……よく話が分かりませんでしたけど、また会えますか？ ハルさんっ」

突然すつとんきょうな明るい声があがった。

同じ円卓に座りながら、全く会話に参加しなかったたるちが、去りゆくハルに問いかける。一部始終をただのコントと勘違いしていた、なんともお気楽な思考が羨ましい。

場違いなほどの笑顔が温室の扉口へ向けられていた。

ハルはその扉に手を掛け、立ち止まって温室を振り返った。

アギトのグリズリーはまだ獲物に狙いを定めていたが、咆哮をあげて襲い掛かる様子はない。

「そうだね。またおしゃべりしたくなったら、寄らせてもらっよ。その時は紅茶の一杯でも出してくれると……嬉しいな」

彫りの浅い、端正な顔立ちが穏やかな表情を一層引き立て、どこか儚げな印象さえ植え付ける。ハルの声は余韻を残さず温室から消えていった。まるで、白光の中に消えてゆくように。

アギトは構えた銃を力なく下ろし、去ってゆく謎の人物の後姿を呆然と見つめた。

百哉は行き場のない焦燥感を、ガゼボの分厚い柱に叩きつける。るちは、青年ののんびりとした歩調と同じく、ゆるやかに閉まる大温室の扉を、飽きるまで眺めていた。

青年は、庭園を背後にし、くすりと小さく笑った。
自らを嘲るような、昏い微笑み。

「あれが鹿賀の……いや、鹿賀と僕が生み出した罪のひとつ……。最後まで見届ける価値はあるかな」

薔薇庭園を振り返って、青年　かつて第六十八代内閣総理大臣として国を動かした人物、現在は政界巨大派閥である誠和会の名誉会長、海馬繁。その私設秘書　鳥居晴一^{ハルイチ}は唇を結んだ。

胸には、議員バッチとは少し趣向の違う金バッチが、おだやかな陽を浴びていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8886d/>

アンダーグラウンド

2010年10月10日16時23分発行